

島根原子力線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2

三大寺遺跡

2009年3月

中国電力株式会社
島根県教育委員会

島根原子力線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 2

三 大 寺 遺 跡

2009年3月

中国電力株式会社
島根県教育委員会

序

当社では、島根原子力発電所3号機の増設にあわせ、特別高圧送電線島根原子力線新設工事を進めています。

本送電線の新設工事に際しては、埋蔵文化財の保護に充分必要な調査の実施、記録の保存につとめるものとし、島根県教育委員会をはじめ関係各位のご協力をいただき、平成16年度から発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は平成19年度から平成20年度に実施した三大寺遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。本報告書が郷土の歴史教育等のため広く活用されることを期待します。

最後に、今回の発掘調査及び報告書の取りまとめにあたり、ご指導ご協力いただきました関係者各位に深く感謝申し上げます。

中国電力株式会社

管財部門長 福本和久

序

島根県教育委員会では、中国電力株式会社の委託を受けて、平成16年度から、島根原子力線送電鉄塔建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施していますが、このたび調査報告書第2集を刊行する運びとなりました。

本報告書は、平成19年度から平成20年度に実施した、松江市朝酌町に所在する三大寺遺跡の発掘調査の記録であります。今回の調査では古墳をはじめ奈良時代の建物跡や中世から近世にかけての古墓群が発見されるなど、貴重な成果が得られました。これらの調査結果は、地域の歴史を解明していく上で大いに役立つものと思われます。本報告書が郷土の歴史と文化財に対する理解や関心を高める一助となれば幸いに思います。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり、ご協力いただきました地元松江市民の方々、中国電力株式会社、松江市教育委員会をはじめ関係の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成21年3月

島根県教育委員会

教育長 藤原義光

例　　言

1. 本書は島根県教育委員会が中国電力株式会社の委託を受けて、平成19年度及び20年度に実施した島根原子力線新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2. 本書で報告する遺跡は次のとおりである。

島根県松江市朝酌町字東平1192-1番地　　三大寺遺跡

字別所571番地

字奥別所573-1番地

字三大寺579、580番地

3. 調査組織は次のとおりである。

【平成19年度】

事務局　卜部吉博（埋蔵文化財調査センター所長）、川原和人（同調整監）、西尾克己（同企画調整スタッフ企画幹）、坂本憲一（同総務G課長）、赤山　治（同総務G企画幹）、廣江耕史（同調査第3G課長）

調査員　角田徳幸（同調査第3G主幹）、園山暢男（同教諭兼文化財保護主任）、濱岡宏行（同教諭兼文化財保護主任）、井谷朋子（同調査補助員）

調査指導　田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）、蓮岡法暉（島根県文化財保護審議会委員）

調査協力　大橋泰夫（島根大学法文学部教授）

【平成20年度】

事務局　卜部吉博（埋蔵文化財調査センター所長）、川原和人（同副所長）、錦田剛志（同企画調整スタッフ企画員）、赤山　治（同総務G課長）、高尾　収（同総務G企画幹）

調査員　宮澤明久（同調査第1G課長）、伊藤　智（同文化財保護主任）、阿部賢治（同調査補助員）、平井大介（同調査補助員）、是田和美（同調査補助員）

調査指導　中村唯史（島根県立三瓶自然館サヒメル学芸員）

4. 本書のうち、挿図中の北は測量法による平面直角座標系XY座標（日本測地系）、第III座標系のX軸方向を指している。

5. 第1図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000を使用した。

6. 本書に掲載した実測図の作成と浄書は調査員・補助員・遺物整理作業員が行い、写真は角田徳幸・伊藤　智が撮影した。

7. 本書の執筆は、第4章を角田徳幸、第1～3章、第5～7章を伊藤智が行い、伊藤智が編集した。

8. 本書に掲載した遺物及び実測図・写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と環境	1
第3章 調査の概要	5
第4章 I 区の調査	
第1節 古 墳	8
第2節 建物跡	9
第3節 古墓群	16
第4節 土 坑	31
第5章 II 区の調査	33
第6章 遺構に伴わない遺物	41
第7章 総 括	51

挿図目次

第1図	周辺の遺跡	2
第2図	三大寺遺跡調査前地形測量図	6
第3図	三大寺遺跡調査終了後地形測量図	7
第4図	古墳実測図	8
第5図	古墳関係遺物実測図	9
第6図	1号建物跡遺構実測図	10
第7図	1号建物跡遺物出土状況実測図	11
第8図	1号建物跡出土遺物実測図1	12
第9図	1号建物跡出土遺物実測図2	13
第10図	2号建物跡出土遺物実測図	14
第11図	2号建物跡遺構実測図	15
第12図	1号墓遺構実測図	16
第13図	古墓群遺構配置図	17
第14図	1号墓出土遺物実測図	18
第15図	2号墓・3号墓遺構実測図	19
第16図	2・3・6号墓出土遺物実測図	20
第17図	3号墓出土五輪塔実測図	21
第18図	4号墓遺構実測図	22
第19図	4号墓出土五輪塔実測図	23
第20図	5号墓遺構・遺物実測図	24
第21図	6～10・12・13号墓遺構実測図	25
第22図	1号盛土・2号盛土遺構実測図	26
第23図	11号墓遺構実測図	27
第24図	11号墓出土遺物実測図	28
第25図	遺構に伴わない五輪塔実測図1	29
第26図	遺構に伴わない五輪塔実測図2	30
第27図	1号土坑・2号土坑遺構実測図	31
第28図	1号土坑出土遺物実測図	31
第29図	3～8号土坑遺構実測図	32
第30図	調査II区遺構配置図	33
第31図	炭溜まり1・炭溜まり2平面図	34
第32図	トレンチ・炭溜まり1・炭溜まり2土層図	35
第33図	柱列1・柱列2実測図	36
第34図	柱列3実測図	37
第35図	炭溜まり1出土遺物実測図	38
第36図	柱列1～3及びトレンチ出土遺物実測図	39
第37図	焼土遺構・11号土坑実測図	40
第38図	遺構に伴わない遺物実測図1	42
第39図	遺構に伴わない遺物実測図2	43
第40図	遺構に伴わない遺物実測図3	44
第41図	遺構に伴わない遺物実測図4	45

図版目次

図版1	三大寺遺跡（上空から）	2 P.1（北西から）
図版2	三大寺遺跡（西上空から）	3 P.2土層（北西から）
図版3	1 三大寺遺跡遠景（西から）	4 P.2（北西から）
	2 古墳調査前（東から）	5 P.3土層（北西から）
図版4	1 古墳調査後（東から）	6 P.3（北西から）
	2 古墳a-b土層北半部（西から）	7 P.4土層（北西から）
	3 古墳a-b土層南半部（北から）	8 P.4（北西から）
	4 古墳c-d土層東半部（東から）	図版14 1 P.5土層（北西から）
	5 古墳c-d土層西半部（東から）	2 P.5（北西から）
図版5	1 1・2号建物跡近景（北から）	3 P.6土層（北西から）
	2 1・2号建物跡近景（北東から）	4 P.6（北西から）
図版6	1 1号建物跡検出状況（北東から）	5 P.7土層（北西から）
	2 1号建物跡（北東から）	6 P.7（北西から）
図版7	1 1号建物跡g-h土層（南西から）	7 P.8土層（北西から）
	2 1号建物跡c-d土層（南から）	8 P.8（北西から）
	3 1号建物跡排水溝土層（南西から）	図版15 1 P.9土層（北西から）
図版8	1 1号建物跡遺物出土状況（北東から）	2 P.9（北西から）
	2 1号建物跡遺物出土状況（南から）	3 焼土（北西から）
	3 1号建物跡分銅出土状況（南東から）	4 焼土土層（北西から）
図版9	1 P.1土層（北東から）	5 2号建物跡（北東から）
	2 P.1（北東から）	6 2号建物跡下東斜面（北東から）
	3 P.2土層（北東から）	7 2号建物跡下西斜面（北西から）
	4 P.2（北東から）	8 2号建物跡下西斜面（北西から）
図版10	1 1号建物跡土坑（北西から）	図版16 1 古墓群検出状況（北西から）
	2 1号建物跡横断土層（北西から）	2 古墓群検出状況（南から）
	3 1号建物跡継断土層（南西から）	図版17 1 古墓群調査後（北西から）
図版11	1 2号建物跡検出状況（北東から）	2 古墓群調査後（南から）
	2 2号建物跡（北東から）	図版18 1 1号墓検出状況（西から）
図版12	1 2号建物跡a-a'土層（西から）	2 1号墓検出状況（北西から）
	2 2号建物跡b-b'土層（西から）	3 1号墓南側五輪塔検出状況（南西から）
	3 2号建物跡c-c'土層（西から）	図版19 1 1号墓土層（西から）
図版13	1 P.1土層（北西から）	2 1号墓（西から）
		3 1号墓遺物出土状況（北東から）
		図版20 1 2号墓検出状況（西から）
		2 2号墓土層（西から）
		3 2号墓（西から）

図版21	1 3号墓検出状況（東から） 2 3号墓検出状況（南から） 3 3号墓土層（西から）	3 2号盛土e-f断面（南西から）
図版22	1 3号墓（西から） 2 3号墓銅錢出土状況（西から） 3 4号墓検出状況（西から）	図版34 1 11号墓検出状況（西から） 2 11-1号墓検出状況（西から） 3 11-1号墓検出状況（南から）
図版23	1 4号墓検出状況（北東から） 2 4号墓土層（西から） 3 4号墓（西から）	図版35 1 11-1号墓土坑検出状況（西から） 2 11-1号墓土層（西から） 3 11-1号墓遺物出土状況（西から）
図版24	1 5号墓東南集石検出状況（東から） 2 5号墓墓壇検出状況（西から） 3 5号墓土層（西から）	図版36 1 11-1号墓（西から） 2 11-1号墓と11-2号墓（西から） 3 11-1号墓と11-3・4号墓（西から）
図版25	1 5号墓集石検出状況（西から） 2 5号墓集石検出状況（南から） 3 5号墓（西から）	図版37 1 11-2号墓検出状況（西から） 2 11-2号墓土層（西から） 3 11-2号墓（西から）
図版26	1 6号墓検出状況（西から） 2 6号墓土層（西から） 3 6号墓（西から）	図版38 1 11-3号墓検出状況（西から） 2 11-3号墓土層（北から） 3 11-3号墓（西から）
図版27	1 7号墓検出状況（西から） 2 7号墓土層（西から） 3 7号墓（西から）	図版39 1 11-4号墓検出状況（西から） 2 11-4号墓土層（西から） 3 11-4号墓（西から）
図版28	1 8号墓検出状況（西から） 2 8号墓土層（西から） 3 8号墓（西から）	図版40 1 12・13号墓検出状況（北から） 2 12号墓（北西から） 3 13号墓（西から）
図版29	1 9号墓検出状況（西から） 2 9号墓土層（西から） 3 9号墓（西から）	図版41 1 1号土坑（西から） 2 1号土坑土層（南から） 3 2号土坑（北から）
図版30	1 10号墓検出状況（西から） 2 10号墓土層（西から） 3 10号墓（西から）	図版42 1 3号土坑土層（北から） 2 3号土坑（北から） 3 4号土坑土層（南東から） 4 4号土坑（南東から） 5 5号土坑土層（西から）
図版31	1 1・2号盛土（南西から） 2 1・2号盛土（北西から） 3 1号盛土a-b土層（北東から）	6 5号土坑（西から） 7 6号土坑土層（西から） 8 6号土坑（西から）
図版32	1 1・2号盛土c-d断面中央部（北西から） 2 1号盛土c-d断面東半部（北西から） 3 1号盛土c-d断面西半部（北西から）	図版43 1 7号土坑土層（西から） 2 7号土坑（西から） 3 8号土坑土層（西から） 4 8号土坑（西から）
図版33	1 2号盛土c-d断面（北西から） 2 2号盛土c-d断面東半部（北西から）	5 1区調査後近景（北から）

図版44	古墳関係遺物及び1号建物跡出土遺物	2 磁群1検出状況(南東から)
図版45	1号建物跡出土遺物1	3 9号土坑(南西から)
図版46	1 1号建物跡出土遺物2 2 2号建物跡出土遺物	図版60 1 焼土遺構・11号土坑(南から) 2 11号土坑土層(南から) 3 炭溜まり2西遺物出土状況(南西から)
図版47	1 1号土坑出土遺物 2 1号建物跡出土土器	図版61 1 II区完掘状況(南西から) 2 II区完掘状況(北東から)
図版48	1号墓出土遺物	図版62 炭溜まり1・炭溜まり2・トレンチ出土遺物1
図版49	2・3・6号墓出土遺物	図版63 炭溜まり1・炭溜まり2・トレンチ出土遺物2
図版50	3・4号墓出土遺物	図版64 1 炭溜まり1・炭溜まり2・トレンチ出土遺物3 2 II区出土生産関係遺物
図版51	4・5・11号墓出土遺物	図版65 遺構に伴わない遺物1
図版52	遺構に伴わない五輪塔	図版66 遺構に伴わない遺物2
図版53	遺構に伴わない五輪塔と火葬骨	図版67 遺構に伴わない遺物3
図版54	1 東壁土層(西から) 2 東壁土層(南西から) 3 炭溜まり2土層(南から)	図版68 遺構に伴わない遺物4
図版55	1 トレンチ6東壁土層(南西から) 2 トレンチ6北壁土層(南東から) 3 炭溜まり1遺物出土状況(北東から)	
図版56	1 炭溜まり1磁検出状況(西から) 2 炭溜まり1東西土層(南から) 3 柱列1~3ピット検出状況(南から)	
図版57	1 P01土層 2 P02土層 3 P03土層 4 P01、P02、P03 5 P04土層 6 P04 7 P05土層 8 P05	
図版58	1 P06土層 2 P06 3 P08土層 4 P08 5 P09土層 6 P09 7 P10土層 8 P10、P14	
図版59	1 柱列1~3(南から)	

第1章 調査に至る経緯

平成12年8月に中国電力株式会社は、国の電源開発基本計画に組み入れられた島根原子力発電所3号機の増設に伴い、この発生電力を送るために、島根原子力線新設工事および第二島根原子力幹線増強工事を計画した。平成19年1月23日に島根県教育委員会は、中国電力株式会社から新設される鉄塔用地（鉄塔No.46）内確認調査の依頼を受けた。3月30日に鉄塔No.46予定地内に埋蔵文化財包蔵地（三大寺遺跡）を確認し、中国電力株式会社に発掘調査が必要であると回答した。7月12日に中国電力株式会社から鉄塔用地内に新たな遺跡が発見された通知を受けた。8月7日に中国電力株式会社から記録保存のための三大寺遺跡の発掘調査の依頼がなされた。8月8日に中国電力株式会社から文化財保護法に基づく発掘調査を行うための土木工事に関する通知がなされた。9月26日に文化財保護法に基づく発掘調査を行うための通知を行った。10月2日に丘陵部分（三大寺遺跡Ⅰ区）の発掘調査を開始し、平成20年1月29日にⅠ区の調査を終了した。平成20年6月2日に北側谷部分（三大寺遺跡Ⅱ区）の調査を開始し、6月26日にⅡ区の調査を終了した。

第2章 遺跡の位置と環境

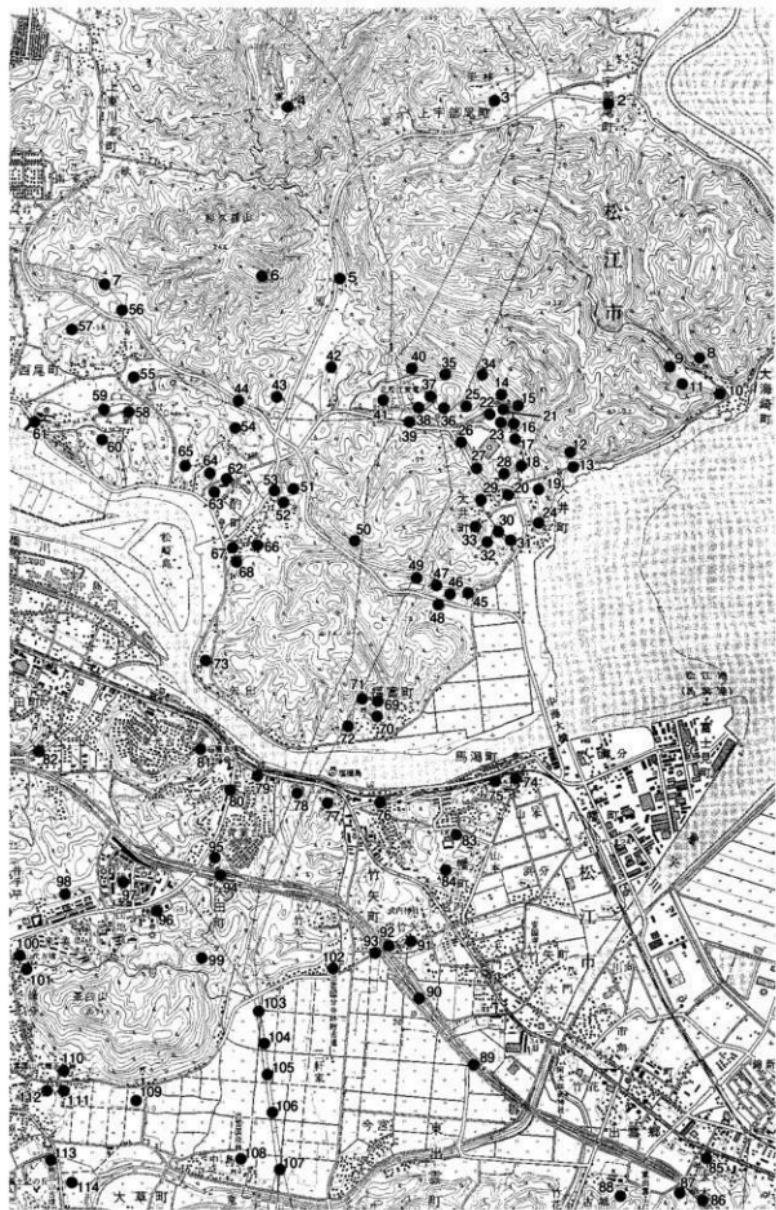
歴史的環境

現在の松江市朝鈞町、大井町、福富町、大海崎町、西尾町を中心とした地域について記載する。
縄文時代 松江市大井町の九日田遺跡（20）では縄文時代後期初頭のドングリ貯蔵穴が検出されている。山津遺跡（12）では黒曜石の石核、スクレイバー、石鏃他、縄文土器と考えられる土器が出土している。朝鈞町の別所遺跡（40）では玄武岩製スクレイバーが1点、イガラビ遺跡（23）では後期とみられる縄文土器が数点出土している。また西尾町の米坂遺跡（56）からは玄武岩製分銅形石器が出土している。

弥生時代 九日田遺跡からは夜臼式並行期の精製壺と中期土器及び石器が出土している。

古墳時代 大橋川北岸における大型古墳としては、西尾町に所在する古墳時代中期の廐所古墳（58）が挙げられる。一辺60mを超える島根県下最大の方墳である。また廐所古墳の谷を挟んだ南西の丘陵には、同時期の觀音山古墳群（60）が位置する。1号墳は一辺約40mの方墳、2号墳は全長約38mの前方後円墳である。この時期に出雲東部を代表する首長墓が大橋川南岸も含めたこの地域に集中して築造されている。後期には全長62mの前方後円墳である魚見塚古墳（73）が朝鈞町に所在する。また小規模古墳としては、西尾町の西谷古墳群（57）、米坂古墳群（7）、朝鈞町の遼倉横穴墓群（44）、九日宮古墳群（43）、横口式石槨の廻原1号墳を含む廻原古墳群（54）、石棺式石室を持つ朝鈞小学校校庭古墳（62）、同じく朝鈞岩屋古墳（67）、福富町の阿弥陀寺古墳（70）、阿弥陀寺裏山古墳群（69）、明事山古墳（72）、福富神社境内古墳（71）、大井町の山巻古墳（30）、大井古墳群（33）、石棺式石室の向山古墳（19）、池ノ奥古墳群（21）、イガラビ古墳群（22）、別所古墳（38）などが挙げられ、垂流のものも含め石棺式石室が多く分布している。

また当地は古墳時代から古代にかけて須恵器窯の集中地域である。古墳時代の窯跡は、大井町に所在する山津窯跡（13）、寺尾窯跡（29）、廻谷向垣窯跡（32）、池ノ奥窯跡（15）、^{八上}明曾窯跡（34）、勝田谷窯跡（35）、ハバタケ窯跡（45）、岩汐窯跡群（49）が挙げられる。廻谷向垣窯跡では、大谷



第1図 周辺の遺跡 (S = 1 : 15,000)

1	三大寺遺跡	30	山巻古墳	59	山辺遺跡	88	吉城山遺跡
2	神田古墳群	31	山巻遺跡	60	親音山古墳	89	夫敷遺跡
3	四反田窯跡	32	勝谷向塙古墳	61	南尾横穴墓	90	布田遺跡
4	布自枳見跡	33	大井古墳群	62	朝駒小学校校庭古墳	91	出雲國分尼寺跡
5	荒神谷遺跡	34	明曾窯跡	63	朝駒小学校前古墳	92	中竹矢遺跡
6	和久羅城跡	35	勝田谷遺跡	64	新山遺跡	93	社日古墳
7	米坂古墳群	36	岩穴平遺跡	65	松ヶ鼻遺跡	94	平所遺跡
8	十二所神社境内遺跡	37	薦沢B遺跡	66	大谷古墳群	95	間内越境丘墓
9	古屋敷遺跡	38	別所古墳	67	朝駒岩星古墳	96	十王免横穴墓群
10	磨干窯跡	39	薦澤W山古墳	68	天井遺跡	97	来雲丘古墳群
11	木ノ谷遺跡	40	別所遺跡	69	阿弥陀寺裏山古墳群	98	山代郷北新造院
12	山津遺跡	41	薦沢A遺跡	70	阿弥陀寺古墳	99	道田古墳群
13	山津窯跡群	42	銅印遺跡	71	福富神社境内遺跡	100	山代方墳
14	池ノ奥A遺跡	43	九日宮古墳群	72	明事山古墳	101	永久宅後古墳
15	池ノ奥窯跡	44	越賀模穴墓群	73	魚見塚古墳	102	出雲國分寺跡
16	池ノ奥C・D遺跡	45	ハバタケ窯跡	74	高良神社境内古墳	103	上小絞遺跡
17	赤坂遺跡	46	岩汐遺跡	75	角森遺跡	104	向小絞遺跡
18	大谷遺跡	47	後瀬遺跡	76	瀬山遺跡	105	四配田遺跡
19	向山古墳	48	岩汐南遺跡	77	竹失矢舟古墳	106	神田遺跡
20	九日田遺跡	49	岩沙窯跡群	78	手間古墳	107	才台塙大屋敷遺跡
21	池ノ奥古墳群	50	岩沙峰遺跡	79	荒神畠古墳	108	出雲國府跡
22	イガラビ古墳群	51	三王谷遺跡	80	親音山古墳	109	大坪遺跡
23	イガラビ遺跡	52	荒神谷古墳群	81	石屋古墳	110	山代郷南新造院
24	イズキ山古墳群	53	朝駒南神社跡古墳	82	石台遺跡	111	寺ノ前遺跡
25	焼山遺跡	54	廻原古墳	83	親音寺古墳群	112	小無田Ⅱ遺跡
26	山ノ奥遺跡	55	駒切窯跡	84	迎接寺裏山古墳群	113	同田山古墳
27	井ノ奥遺跡	56	米坂遺跡	85	大木樺隈山塙丘墓	114	岩屋後古墳
28	大井神社境内遺跡	57	西谷古墳群	86	島田池遺跡		
29	寺尾窯跡	58	廟所古墳	87	岸尾遺跡		

編年1期の須恵器が確認されている。

集落遺跡他としては、中期から後期にかけての掘立柱建物跡と玉製品、砥石が出土した西尾町の米坂遺跡、大井町に所在する竹管文が施されている円筒形の土器が出土した山巻遺跡（31）、前期古式土師器の壺、甕、中期の高坏が出土した九日田遺跡、イガラビ遺跡、大井町及び朝駒町の岩穴平遺跡（36）。多くの建物跡が検出され、また37点の土馬、4点の土鉢、銅印などが出土した朝駒町の薦沢A遺跡（41）、別所遺跡などが挙げられる。山巻遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期頃の墳墓の可能性が考えられ、また朝駒町から大井町にかけての地域では、須恵賀土馬、窯壁体など須恵器生産と関係する遺物の出土が確認されている。

古　代 古墳時代から引き続き、この時期においても須恵器生産に関連する遺跡が朝駒町から大井町にかけての地域で多く確認されている。

古代の窯跡は、大井町の山津窯跡、池ノ奥窯跡、明曾窯跡、勝田谷窯跡、ハバタケ窯跡、岩汐窯跡群、大滝崎町の唐干窯跡（10）が挙げられる。

集落遺跡他としては、別所遺跡、石列構造が検出された朝駒町の荒神谷遺跡（5）、大井町のイガラビ遺跡、池ノ奥A遺跡（14）、池ノ奥C・D遺跡（16）が挙げられる。

中　世 中世において当地は朝駒郷及び長田西郷に比定されている。

別所遺跡では遺物包含層から大量の中世須恵器が出土しており、中世須恵器の生産が推定されている。また朝駒町の和久羅城跡（6）は、和久羅山山頂に柳、土墨、楓形虎口などが構築されている。尼子氏・毛利氏の争乱時には軍事上重要な位置を占めていたと考えられ、周辺にはその支城も確認されている。大井町の岩汐峰遺跡（50）では16世紀と考えられる経塚が検出されている。山津遺跡では、亀山系須恵器が出土している。

参考文献

- 加藤義成 1997 『修訂出雲国風土記参究』今井書店
- 朝酌郷土史編集委員会 2001 『朝酌町誌』
- 『島根県の地名 日本歴史地名大系33』 1995 平凡社
- 出雲考古学研究会 1987 『古代の出雲を考える6 石棺式石室の研究』
- 松江市教育委員会 1981 『岩穴平遺跡 稲葉城跡』
- 松江市教育委員会 1988 『薙沢A遺跡・薙沢B遺跡・別所遺跡』
- 松江市教育委員会 1990 『鉢田遺跡・朝酌荒神遺跡・イガラビ遺跡・イガラビ古墳群・池ノ奥古墳群・池ノ奥C、D遺跡・池ノ奥A遺跡・池ノ奥窯跡』
- 松江市教育委員会 1999 『西尾地区農林漁業用揮発油税財源整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・邇倉横穴墓群・米坂古墳群ほか』
- 松江市教育委員会 2000 『九日田遺跡発掘調査報告書』
- 松江市教育委員会 2003 『山津窯跡発掘調査報告書－2・3号窯跡－』
- 松江市教育委員会 2006 『大井窯跡群 山津窯跡・山津遺跡発掘調査報告書』
- 島根県古代文化センター 2004 『出雲国風土記の研究II 島根郡朝酌郷調査報告書』
- 島根県古代文化センター 2000 『松江市東部における古墳の調査』
- 島根県教育委員会 1998 『島根県中近世城館跡分布調査報告書〈第2集〉 出雲・隠岐の城館跡』

第3章 調査の概要

三大寺遺跡は、標高41mほどの低丘陵上から斜面に位置しており、古墳1基・掘立柱建物跡2棟、古墓13基のほか、土坑・ピットなどからなる。

丘陵頂部に築かれた古墳は径10m・高さ0.5mほどの高まりが認められたが、既に削平を受けており、盛土や埋葬施設は失われていた。周辺では古墳時代中期の須恵器高环片と鉄鏃が採取されており、これらが古墳に伴う遺物と考えられる。

掘立柱建物跡は丘陵北側斜面に位置し、2段に造成された平坦面に1棟ずつが営まれている。

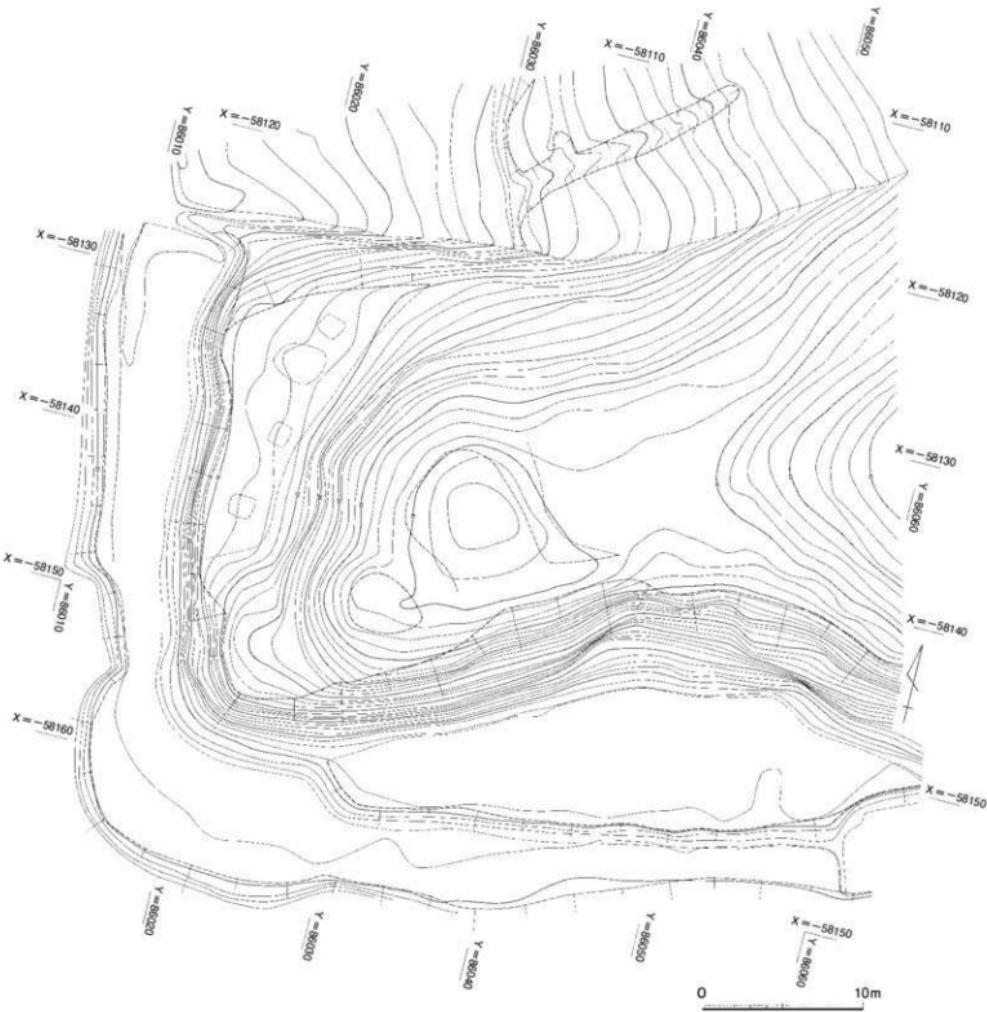
1号建物跡は柱の配列を明確にできなかったが、東西8m・南北4.5mほどの平坦面に造られた掘立柱建物跡と見られる。平坦面の壁際には排水溝、床面にはピットのほか、隅丸方形の土坑1基、地面が赤く硬化した炉跡3ヶ所が検出されている。遺物には、土師器甕・瓶、須恵器壺・高环・皿・甕・横瓶、鉄製摘鎌などがあり、特に銅製分銅を忠実に模倣した陶製分銅が出土した点が注目される。2号建物跡は東西8m・南北3mほどの平坦面を造成し、桁行4間ほどの掘立柱建物が営まれる。床面にはやはり地面が赤く硬化した炉跡1ヶ所あり、土師器甕・須恵器壺・甕などが出土している。

古墓は丘陵西側斜面に造成された南北27m・東西7mほどの平坦面に営まれている。古墓には石積みの基壇をもち、五輪塔が立てられていたと見られるもの（1・2・3・4号墓）、基壇の上に盛土が行われたもの（11号墓）、墓坑の上に標石を置いたもの（5・6・7・10号墓）、墓坑のみもつもの（8・9・12・13号墓）、基壇上に五輪塔が立てられていたと見られるが内部に埋葬の痕跡がない供養墓（4号墓）がある。埋葬方法には、火葬と土葬があり、火葬墓は1・2・3・11・12・13号墓、土葬墓は5・6・7・8・9・10号墓である。

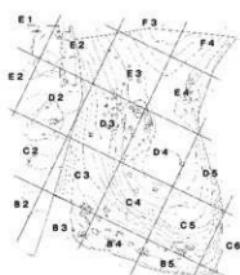
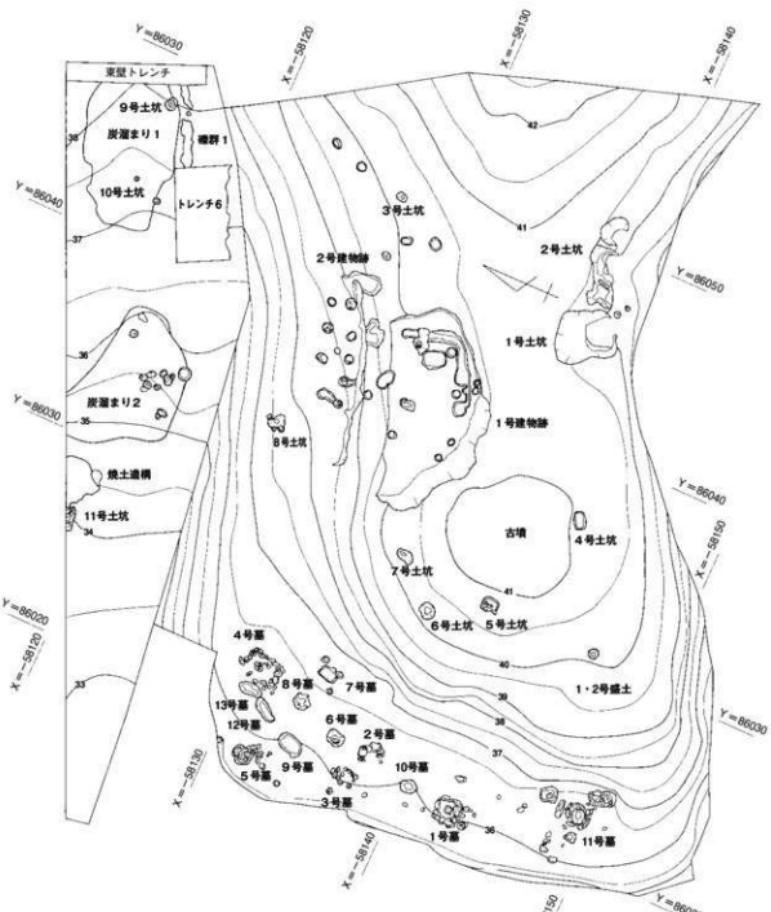
このうち、1号墓は方形基壇の上に五輪塔の地輪が遺存していた。基壇の内部には火葬骨の混じる黒色土が入っており、開元通寶と北宋錢20枚枚が副葬されている。3号墓は五輪塔を転用した基壇をもち、内部より火葬骨と開元通寶・永楽通寶が出土した。11号墓も石囲い基壇をもち、基壇は北西隅に五輪塔地輪が置かれていた。内部からは火葬骨のほか銅錢・鉄釘が出土している。11号墓の周辺にはこれに付随する埋葬施設と見られる土坑3基があり、これらを含め基壇の上部には長さ9m・幅6mの範囲に高さ1.7mほどの盛土がなされていた。

5号墓と7号墓は内部に大形の石が落ち込んだ状態で確認されており、これらは標石として置かれた集石が陥没したものと見られる。土葬墓では遺物は確認されていない。

平成20年度に調査を実施した調査II区は、前年度調査区（調査I区）の北の谷部分であり、標高33~38mの比較的緩やかで平坦な斜面に位置している。炭溜まり2ヶ所、柱列3棟、焼土遺構1基、ほか土坑・ピットからなる。炭溜まり1では古墳時代後期及び奈良時代の須恵器を中心に、土師器、須恵質土馬、炉壁材、黄灰色の礫片などが炭片と共に出土した。炭溜まり2に関しては、須恵器及び土師器と共に炭片が多く出土した。またこれら遺構が検出された遺構面の下層において古墳時代後期の遺物包含層を確認したが、今回の調査では鉄塔が敷設される部分（トレンチ6）のみ地山まで掘削した。



第2図 三大寺遺跡調査前地形測量図 ($S = 1/300$)



グリッド配置図

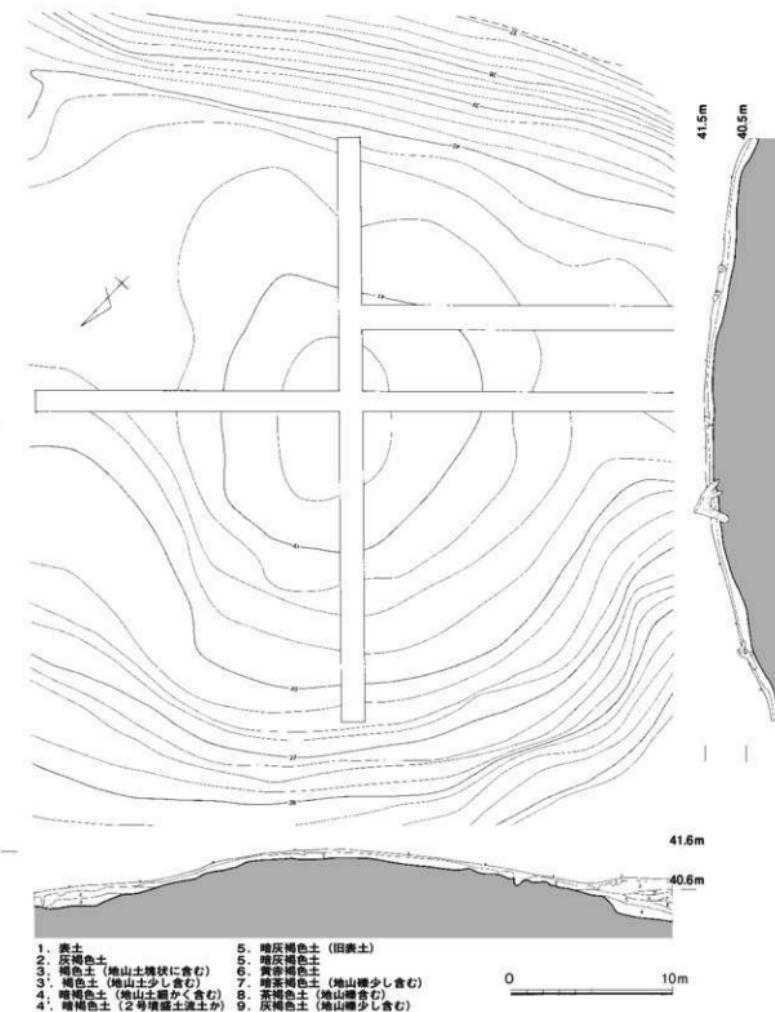
第3図 三大寺遺跡調査終了後地形測量図 ($S = 1/250$)

第4章 I 区の調査

第1節 古 墳

(1) 墓 丘

調査前には、標高41.5mの丘陵頂部を中心に1辺10m・高さ0.5m程度の低い方墳状の高まりが認められた。発掘前の地形測量では、この墳丘状の高まりから南西側にさらに2つの盛土構造が並



第4図 古墳実測図 ($S = 1/300$)

び、古墳群であることが推定されたが、後述するように南西側の盛土遺構は11号古墓に伴う盛土であることが明らかになっている。

調査は、丘陵頂部の墳丘を中心に土層観察用の畦を設定して、慎重に掘り下げを行った。

その結果、表土下20cm程で地山に達したが、盛土や埋葬施設を確認することはできなかった。しかし、墳丘周囲の調査では、古墳時代中期後半の須恵器高坏や鉄鎌が検出されていることから、この地点に古墳が存在した可能性は否定できない。墳丘の東側は奈良時代の遺構によって削平を受けている他、南西側の古墓に伴う盛土遺構も丘陵頂部の土を用いたと考えられ、こうした改変により古墳の盛土・埋葬施設が失われたものと考えられる。

(2) 遺 物

第5図1は須恵器高坏の脚部である。3方向に透孔が配され、直立する丸味を帯びた端部をもつもので、外面にはカキメ調整が施される。

2は圭頭鎌である。莖部を欠損するが、鋒部は長さ4.5cm・先端幅2.5cm・厚さ0.7cmである。

第2節 建物跡

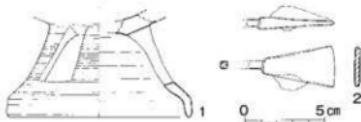
(1) 1号建物跡

丘陵北側斜面に位置するもので、下段の2号建物跡との比高差は1m余りである。

斜面をL字形に加工した東西8m・南北4.5mほどの平坦面に造られた掘立柱建物跡と見られるが、柱の配列を明確にできなかった。平坦面の壁際にはL字形にめぐる排水溝があり、幅25~70cm・深さ15cmである。床面で検出されたピットのうち、柱穴に当たると見られるものはP.1・P.2がある。P.1は径45~50cm・深さ35cm、P.2は径40cm・深さ10cmで、P.1-P.2間の距離は2.2mである。P.3は長楕円形を呈するもので、周囲に厚さ4cmほどの焼土面が3ヶ所にあり、炉に関わる施設とも思われる。大きさは長径85cm・短径45cm・深さ35cmで、内部には上層より暗灰褐色土(8層)・炭化物を含む灰褐色土(4層)が入っていた。

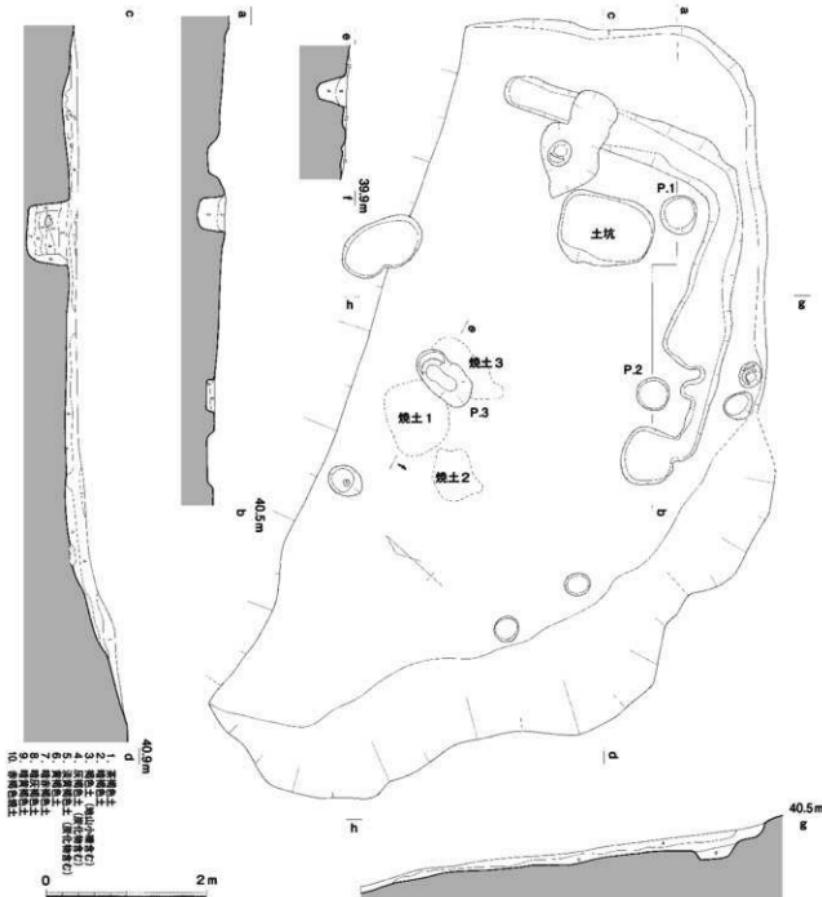
平坦面の東寄り床面で検出された土坑は、隅丸方形を呈するもので、長さ120cm・幅85cm・深さ50cmである。横断土層を見ると、底面には暗赤褐色土(7層)が見られるが、その上には壁に沿って暗灰褐色土(8層)が立ち上がっており、土坑内に木枠のようなものが入っていた可能性が考えられる。内部からは須恵器皿(第9図24)と鉄製摘鍵(同27)が出土している。

遺物は、排水溝付近の床面を中心、土師器甕・甌・須恵器坏・高坏・甕・横瓶などが出土した。第8図1~18、第9図19~25・26・28・33は須恵器である。1は坏蓋片で、口縁端部が垂直に屈曲する。2・3は高台をもつ坏身である。2の底部外面は回転ナデ調整され、切り離し痕を残さない。3は丸味のある体部をもつ口径がやや大きい坏身で、底部に回転糸切り痕を留めている。4~22は無高台の坏身である。口縁部は4・5のように屈曲が大きいものがあるが、総じて緩く括れるものが多い。底部は切り離し痕を調整せずそのまま残しており、6は静止糸切りの可能性があるが、他はすべて回転糸切りである。



第5図 古墳関係遺物実測図 (S = 1 / 3)

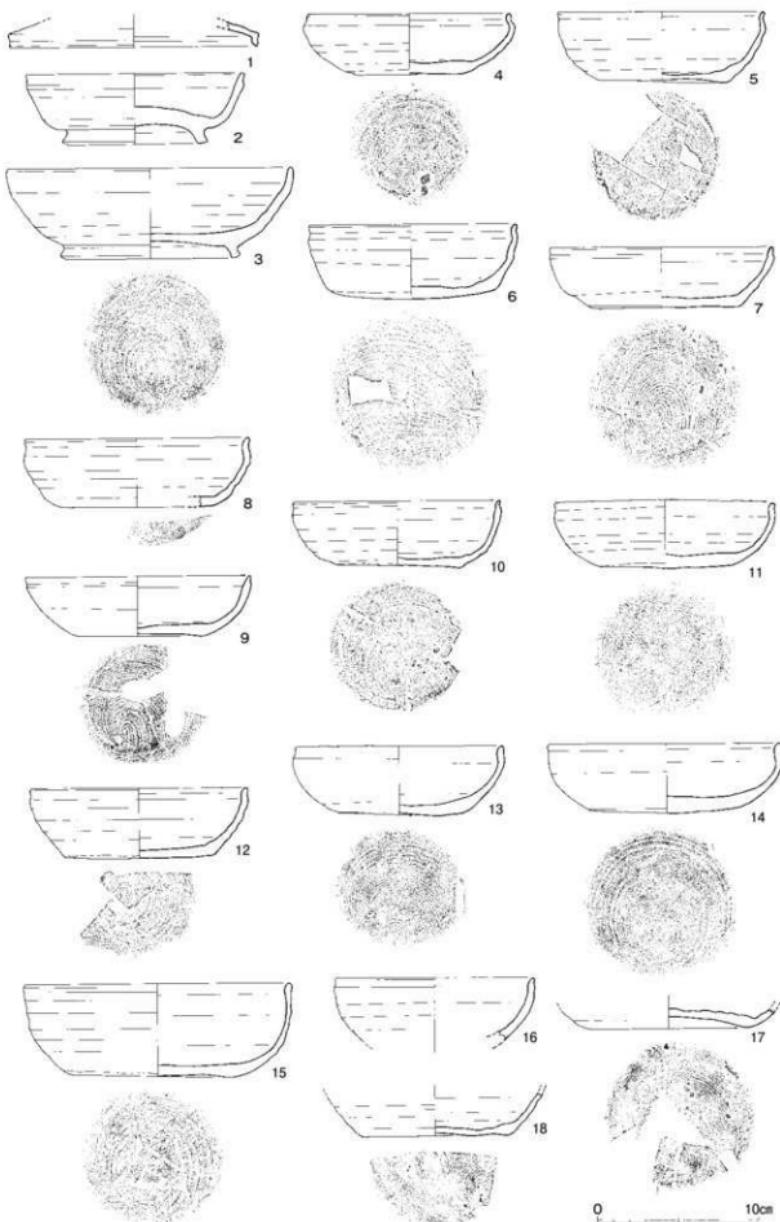
第9図23は須恵器高坏である。脚部径が6.0cmと大きく、1ヶ所に線状の切り込みがある。24は皿である。無高台で体部は丸味を帯びるが、器高は2.0cmと低く、底部には回転ヘラケズリが施される。25は短頸壺の蓋である。頂部には静止糸切り痕があり、周囲には回転ヘラケズリが入る。26は陶製分銅で、径3.3cm・高さ2.6cm・重さ27.5gである。表面には襄状の凹凸が付けられ、下端は低い台状になっており、中央には孔が貫通する。胎土は密、焼成は良好で、青灰色を呈する。28は屈曲する短い口縁をもつ甕で、胴部は外面に平行タタキ、内面には同心円状の當て具痕が残る。33は横瓶で、胴部は外面に平行タタキの後カキメ、内面には同心円状の當て具痕がある。



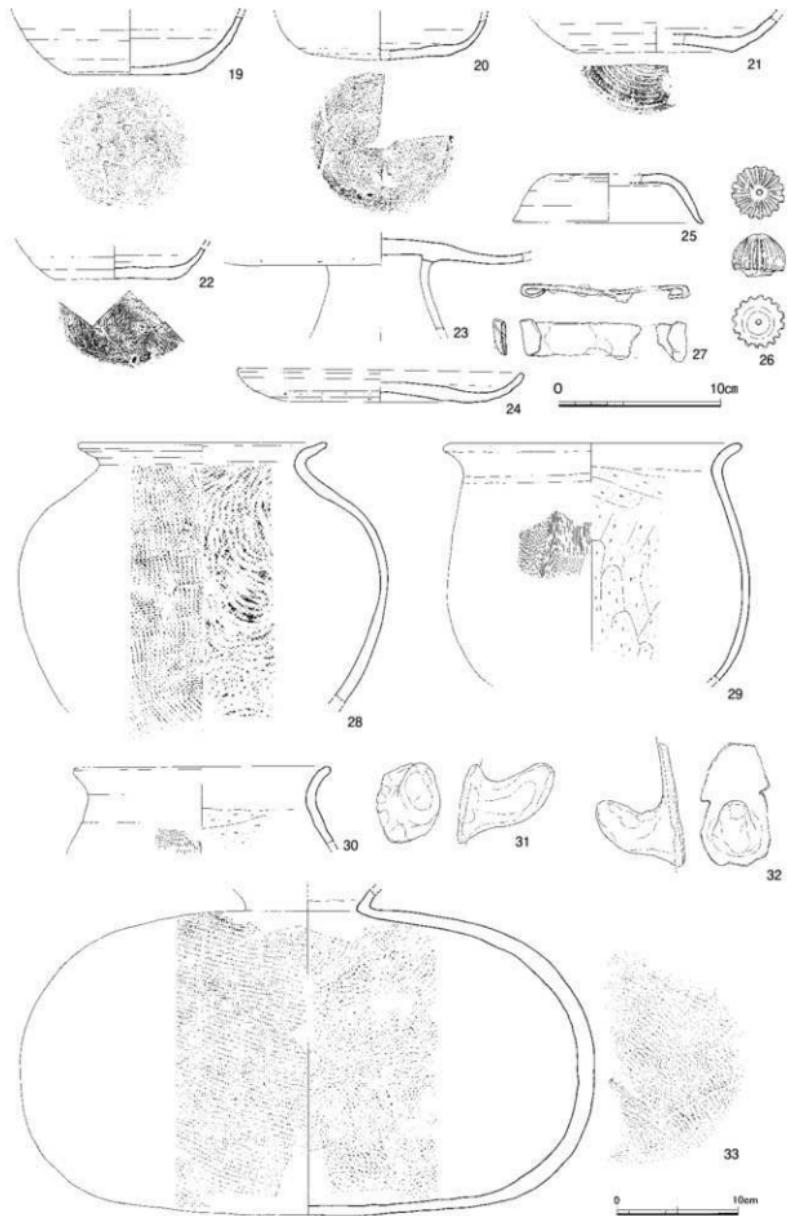
第6図 1号建物跡遺構実測図 ($S = 1/60$)



第7図 1号建物跡遺物出土状況実測図 (S = 1 / 60)



第8図 1号建物跡出土遺物実測図1 (S = 1 / 3)



第9図 1号建物跡出土遺物実測図2 (S = 1/3・1/6)

第9図29~32は土師器である。29・30は甌で、ともに外反する口縁をもっている。胴部外面はハケメ、内面はケズリで、外面に煤が付着している。31・32は甌の把手と見られる。外面は指押さえ、内面にはケズリが入る。

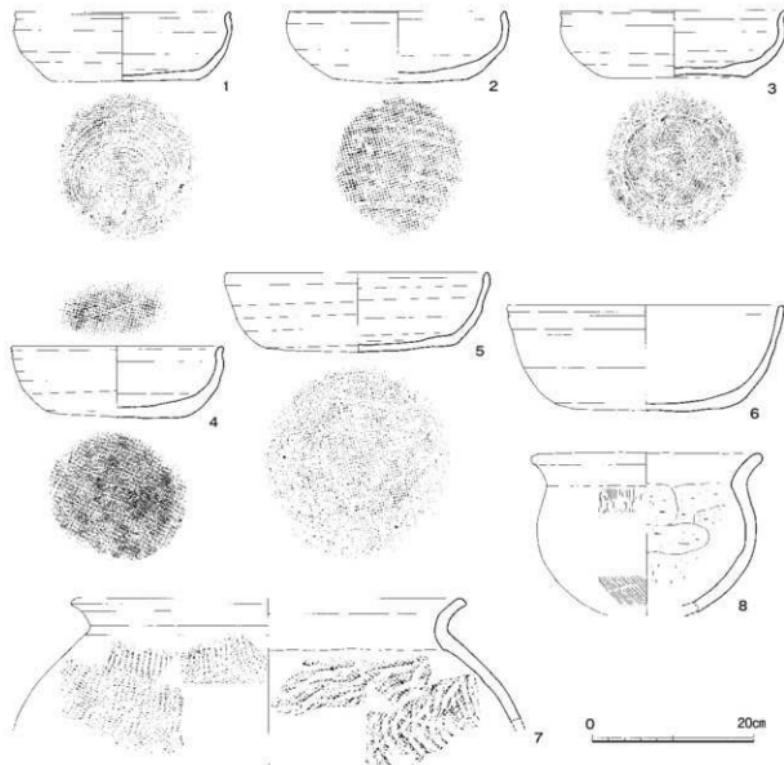
第9図27は鉄製摘鎌である。一部を欠損するが、両端の折り返し部が残っている。刃部の幅は2cm・厚さは0.3cmである。

(2) 2号建物跡

丘陵北側斜面に中程に位置するものである。

斜面をL字形に加工した東西8m・南北3mほどの平坦面を造成し、掘立柱建物が営まれている。柱穴列は2列あり、P.1~P.5とP.6~P.8が見られる。両者の柱間は微妙に異なるところがあるが、1.2~1.3m間隔でほぼ平行に並んでおり、平坦面の広さを考慮すると、これが梁間となるような1間×4間で、長さ5.3m・幅1.3mの狭小な建物跡も考えられる。

ピットの大きさは、P.1が径45cm・深さ13cm、P.2が径45cm・深さ27cm、P.3が径45cm・深さ25cm、P.4が径35cm・深さ35cm、P.5が径40cm・深さ30cm、P.6が径40cm・深さ10cm、P.7が径52cm・深さ50cm



第10図 2号建物跡出土遺物実測図 (S = 1/3・1/6)



第11図 2号建物跡遺構実測図 ($S = 1 / 60$)

cm、P.8が往55cm・深さ30cmである。ピット間の距離は、P.1-P.2間が1.5m、P.2-P.3間が1.3m、P.3-P.4間が1.2m、P.4-P.5間1.2m、P.1-P.6間1.2m、P.6-P.7間が1.3m、P.7-P.8間が1.5m、P.3-P.8間が1.3mである。ピットのうち、P.2・P.4・P.5・P.7で柱痕跡が確認されている。また、P.2-P.3のやや北寄りでは、床面が赤く焼けた焼土が見られた。

遺物は建物跡の東半部を中心に検出されており、須恵器壺・甕、土師器甕などがある。第10図1～7は須恵器である。1～4は無高台の壺身で、いずれも口縁部が緩く括れ、体部が丸味を帯びている。底部は1・3・4が回転糸切り、2が静止糸切りで、いずれも未調整である。4の内面には「X」印のヘラ記号がある。5・6も壺身であるが、口径が1～4に比べて大きく、口縁が括れないものである。5の底部は回転糸切り後、未調整、6は不明である。7は短い口縁部が外反する甕で、胴部外面は平行タタキののち、カキメ、内面には同心円状の当て具痕が残る。

8は土師器甕で、口縁が外反し、外面はハケメ、内面はヘラケズリである。

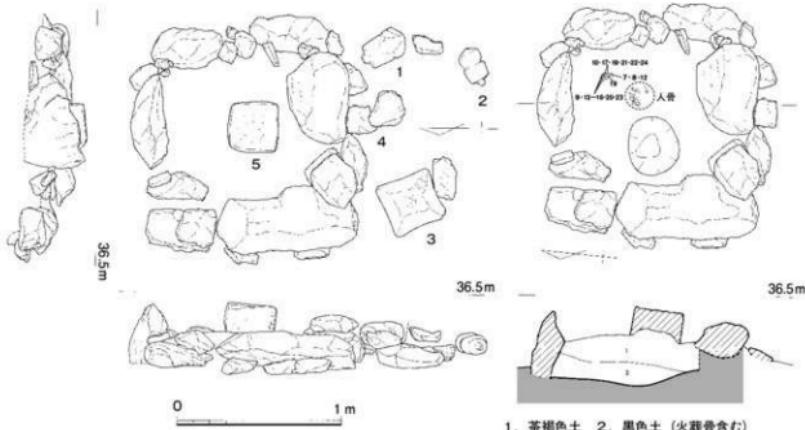
第3節 古墓群

(1) 1号墓

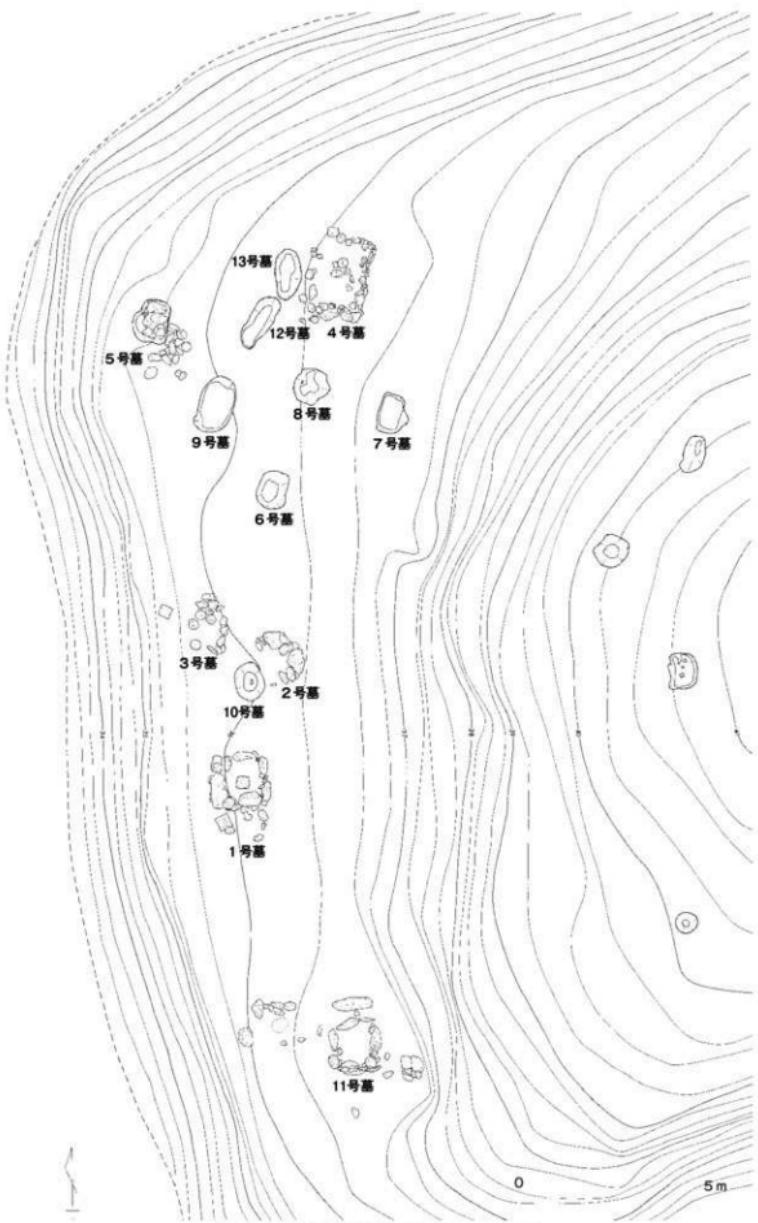
平坦面の南寄りに位置するもので、隣接する2号墓は北1.5m、11号墓は南東5mである。

方形基壇をもつ火葬墓で、基壇は南北1.3m・東西1.4m・高さ0.25mである。北辺には立石が用いられるが、その他の辺は石材を1～2段積む程度である。基壇の中央部には、五輪塔の地輪が原位置を保った状態で残っており、1号墓に伴うかどうかは不明であるが、基壇の南側で五輪塔の空風輪2点、火輪1点、水輪片1点が検出されている。基壇の内部は、上層より茶褐色土（1層）・黒色土（2層）が入り、底面の西寄りでは径30cmほどの浅い掘り込みが確認されている。基壇内部の北東寄りでは銅鏡2枚と、その周辺を中心に火葬骨も出土した。

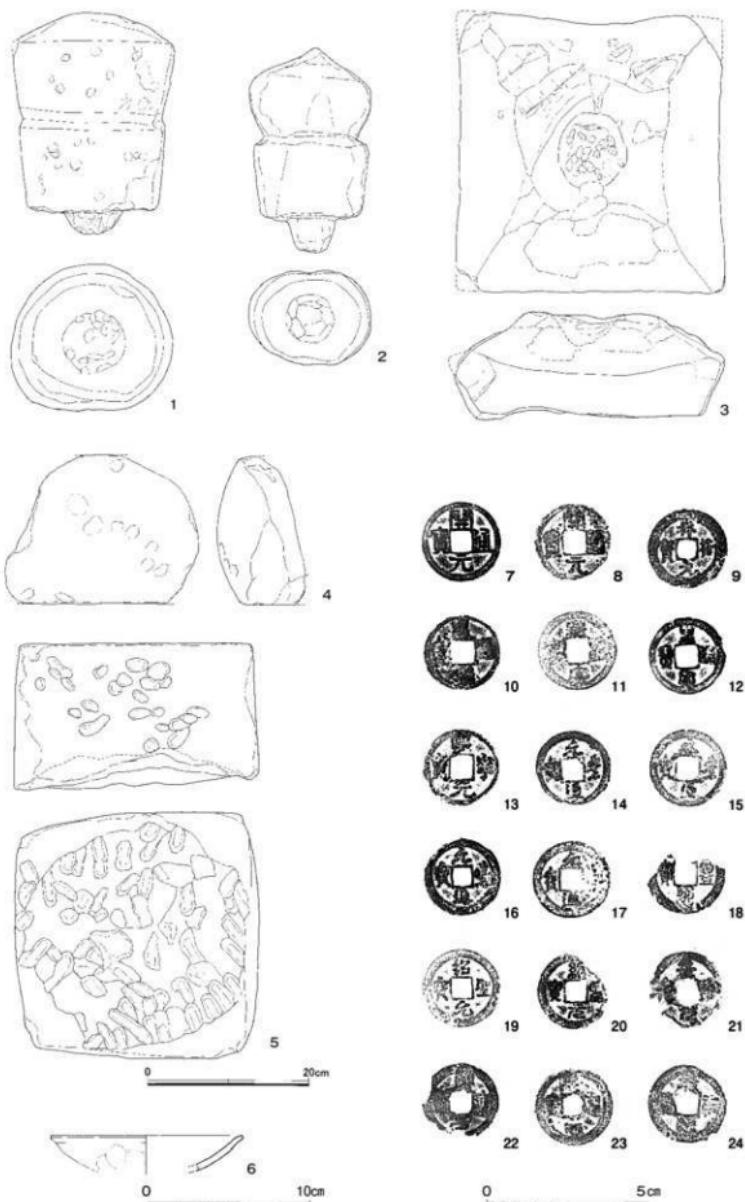
第14図1と2は空風輪である。1は空輪頂部が丸味を帯び、空風輪の括れ部は溝を廻らせたもので、高さ27.0cm・空輪径20cm・風輪径18cmである。下端の柄は丸みを帯び短く、径7.5cm・高さ2.5



第12図 1号墓遺構実測図 (S = 1 / 30)



第13図 古墓群遺構配置図 ($S = 1 / 125$)



第14図 1号墓出土遺物実測図 ($S = 1/6 \cdot 1/3 \cdot 2/3$)

cmである。2は頂部が宝珠形を呈し、括れ部の明確なもので、高さ25.0cm・空輪径15.0cm・風輪径14.0cmである。下端の柄は細く、径6.0cm・高さ4.0cmである。3は火輪である。一辺32~34cmの方形で、高さは12cmと低いのが特徴であり、頂部に径8cm・深さ3.5cmの柄穴が設けられる。空風輪1と組み合う可能性がある。4は水輪の破片で、復原径30cm・高さ18.5cmである。上下面に窪みが見られるが、下面是割り込みが深い。5は地輪で、一辺26~30cmの方形を呈し、高さは17~18cmである。下面には4cmほどの割り込みがあり、加工痕が顕著に残る。

6は土師質土器皿である。体部は丸みを帯び、外面は指押さえで、型作りと見られる。

7~24は銅鏡である。7・8は開元通寶、9は祥符元寶、10~12は皇宋通寶、13は熙寧元寶、14~18は元豐通寶、19・20は紹聖元寶、21は景祐元寶、22~24は不明である。

(2) 2号墓

平坦面のほぼ中央部に位置するもので、3号墓の東0.8m、10号墓の東側に隣接する。

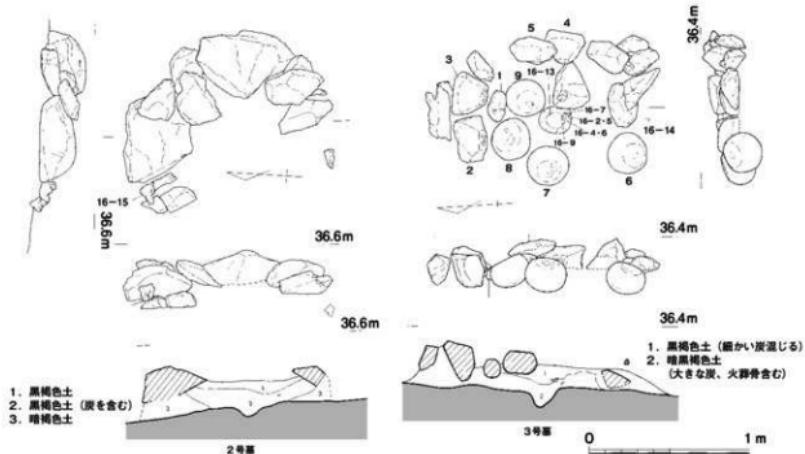
本来、方形基壇をもつものであったと見られるが、西及び南辺の石材は失われており、基壇は現状で北辺1.0m・東辺0.9m・高さ0.2~0.3mである。各辺は石材を1段または2段に積んでおり、北辺には石臼片も含まれていた。基壇の内部には上層より黒褐色土(1層)・炭を含む黒褐色土(2層)が入っており、底面には浅い掘り込みがある。2層の中からは骨片は確認できなかったが、炭が含まれることや、鉄釘が出土したことから、本来は火葬骨を納めていたものと考えられる。

第16図11は鉄釘で、頭部を欠くが、現状で長さ4.6cm・幅0.4cmである。15は石臼片である。上臼に当たるものと見られ、上縁と窪み、下面には放射状に捕目が入る。窪みに見られる孔は径4cm程度で、石臼周縁に対し偏った位置にあることから、穀物の供給孔に当たる可能性がある。

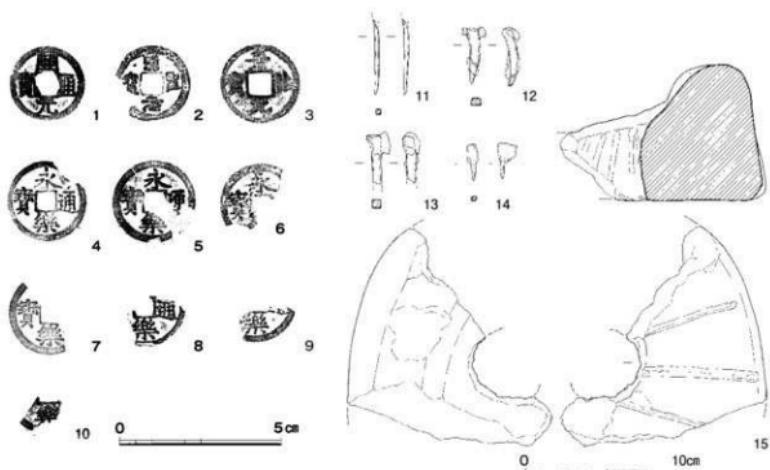
(3) 3号墓

平坦面のほぼ中央部に位置するもので、1号墓の北2.5m、6号墓の南東2.5mにある。

長方形基壇をもつ火葬墓で、基壇は南北1.3m・東西1.0m前後で、高さは0.25mである。北辺と



第15図 2号墓・3号墓遺構実測図 (S = 1/30)



第16図 2・3・6号墓出土遺物実測図 (S=2/3・1/3)

東辺には五輪塔火輪4点が頂部を内側に向けて並べられ、内側には空風輪1点と水輪4点が置かれていた。基壇の内部には、上層より炭が混じる黒褐色土(1層)・炭を含む暗黒褐色土(2層)が入り、2層からは火葬骨と銅銭10枚・鉄釘2本が出土している。

第16図1~10は銅銭である。1は開元通寶、2は天慶元寶、3は景祐元寶、4~10は永樂通寶である。13・14は鉄釘で、13は長さ3.0cm・幅0.6cm、14は長さ2.3cm・幅0.3cmである。

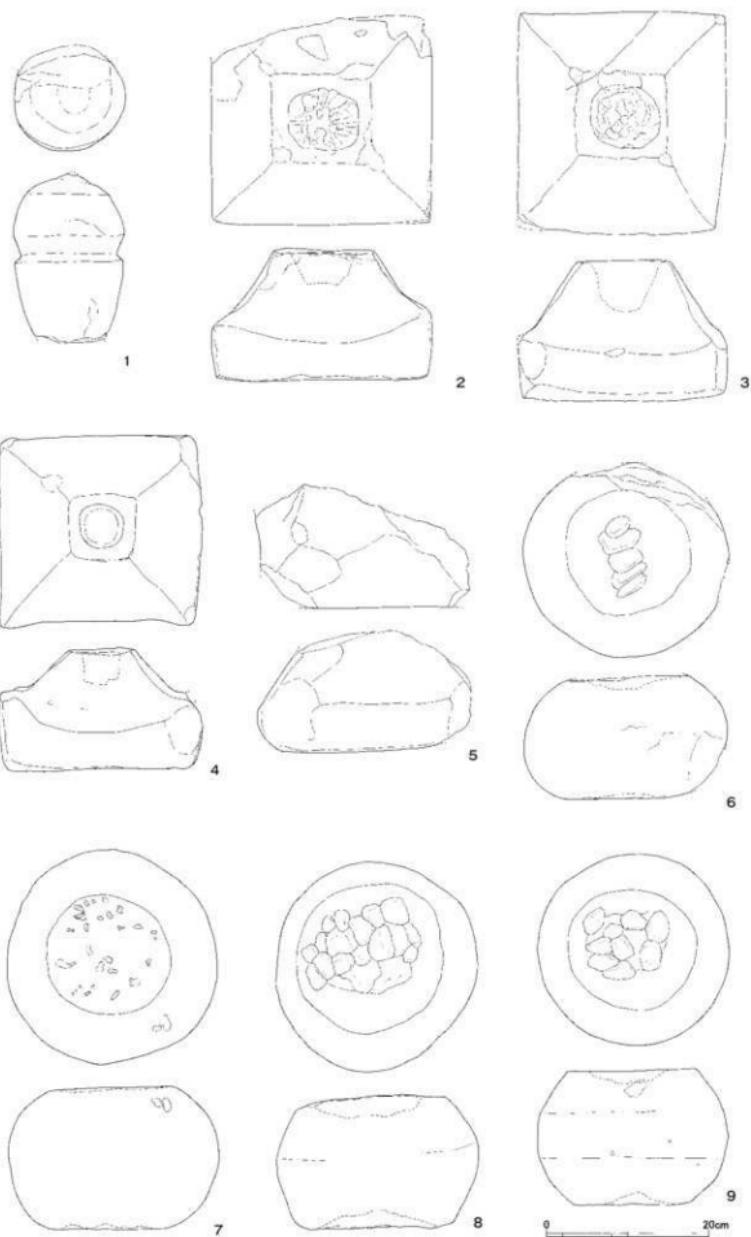
第17図1は空風輪で、下端を欠くが空輪に対し風輪が大きい。径13.5cm・高さ20.5cmである。2~5は火輪である。2は一辺27cmの方形で、高さは16.0cm、頂部に径7.5~8.5cm・深さ4.0cmの枘穴がある。3は一辺24.5~27.0cmの方形で、高さは17.5cm、頂部に径8.0~8.5cm・深さ6.2cmの枘穴がある。4は一辺22.5~24.0cmの方形で、高さは15.0cmで、頂部に径5.3cm・深さ4.0cmの枘穴がある。5は隅部である。

6~9は水輪である。6は径25.0cm・高さ15.0cmで、上下面に浅い窪みが見られる。7は径26.0cm・高さ17.5cmで、上下面に浅い窪みがある。8は径24.5~25.5cm・高さ16.0cmで、上下面に2cm前後の窪みがある。9は径23.5cm・高さ16.5cmで、上下面に1.5cm前後の窪みがある。

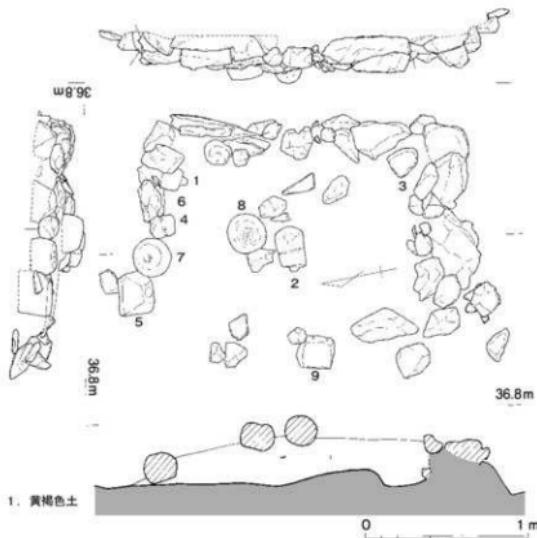
(4) 4号墓

平坦面の北端部に位置するもので、12・13号墓の東側に隣接する。

長方形基壇をもつもので、基壇は南北2.0m・西辺の遺存状況は良くないが東西1.5m前後、高さは0.25~0.3mである。基壇の石積みは北辺には五輪塔空風輪2点・火輪2点・水輪1点、西辺には地輪1点が用いられ、東・南辺は割石が1~2段積みされている。基壇の内部は、黄褐色土(1層)のみで、その上面で空風輪と水輪が検出されているが、埋葬の痕跡は確認されなかった。隣接する12・13号墓で火葬骨が確認されていることから、多少位置はずれるがこれに伴う基壇である可能性と、埋葬を伴わない供養塔である可能性が考えられる。



第17図 3号墓出土五輪塔実測図 (S = 1 / 6)



第18図 4号墓遺構実測図 ($S = 1/30$)

破片で、現状で高さ17.5cm・風輪径13.0cmである。下端の柄は径6.5cm・高さ3.5cmである。

5・6は火輪である。5は一辺26.0cmの方形で、高さは14.0cm、頂部に径6.0cm・深さ4.0cmの柄穴が設けられる。6は各辺がやや丸味を帯びるが一辺26.5cmの方形で、高さは17.5cm、頂部に径5.0cm・深さ3.5cmの柄穴がある。

7・8は水輪である。7は径23.5cm・高さ15.0cmで、上下面に深さ1.5~2.0cmの窪みがある。8は径23.5cm・高さ15.0cmで、上下面に3cm前後の窪みがある。

9は地輪である。一辺21.5cm・高さ18.0cmで、各面に顕著な加工痕が残り、下面には深さ3.0cmの削り込みが見られる。

(5) 5号墓

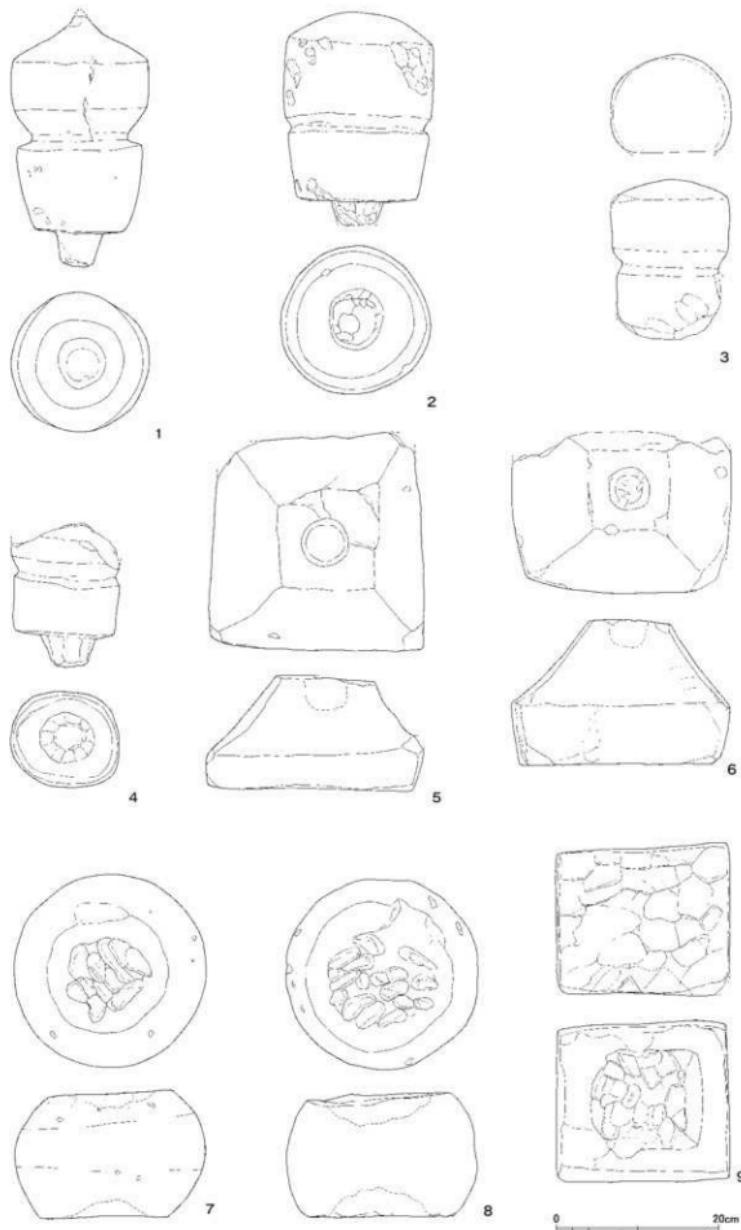
平坦面の北端部にあり、4号墓の西3.5m、9号墓の北西1.5mに位置する。

墓坑の南東に隣接する位置に集石、墓坑の内部にも石が落ち込んでおり、土葬墓と考えられる。

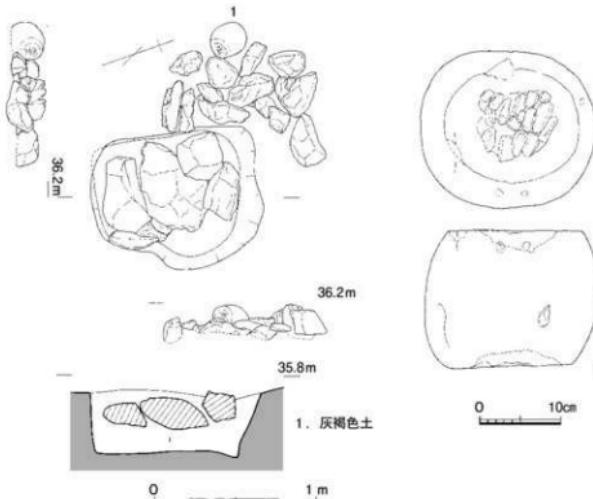
墓坑東南の集石は南北95cm・東西60cmの範囲に石が集められており、その中には五輪塔水輪が1点含まれていた。墓坑は長さ1.0m・幅0.85m・深さ0.4mで、埋土である灰褐色土（1層）の中程に大形の石材が陥没したような状態で入っていた。その状況から見て、標石として墓坑上に置かれた石が陥没した後、改めて集石が行われたものと思われる。

第20図1は集石に含まれていた五輪塔水輪である。径19.5~21.5cm・高さ17.0cmで、上下面に深さ2.0~2.5cmの窪みがある。

第19図1~4は空風輪である。1は空輪が宝珠形を呈するもので、空風輪の括れ部が明確で、高さ30.5cm・空輪径16.5cm・風輪径15.5cmである。下端の柄は細く、径6.0cm・高さ4.2cmである。2は空輪頂部が丸味を帯び、括れ部に溝を廻らせたもので、高さ26.0cm・空輪径18.0cm・風輪径17.0cmである。下端の柄は短く、径6.5cm・高さ3.0cmである。3も空輪頂部が丸味を帯び、括れ部に溝を廻らせたものであるが、下端は欠損する。現状で高さ20.0cm・空輪径15.0cmである。4は空輪下端の



第19図 4号墓出土五輪塔実測図 (S = 1 / 6)



第20図 5号墓遺構・遺物実測図 (S = 1/30・1/6)

(6) 6号墓

平坦面の北半部にあり、3号墓の北4.0m、9号墓の南西1.5mに位置する。

墓坑の上面に標石が置かれた土葬墓と考えられる。墓坑は長さ0.9m・幅0.65m・深さ0.3mで、埋土は上層より地山礫を含む暗褐色土（1層）・褐色土（2層）の順に堆積する。標石は30cm大で、1層に入っていた。墓坑内からは鉄釘1点が出土している。

第16図12は鉄釘である。やや曲がるが完形で、長さ3.5cm・幅0.6cm・厚さ0.5cmである。

(7) 7号墓

平坦面の北半部にあり、4号墓の南東2.0m、8号墓の東1.5mに位置する。

墓坑の上面に標石が置かれた土葬墓と見られる。墓坑は長さ0.95m・幅0.55m・深さ0.3mで、埋土は灰褐色砂質土（1層）のみである。墓坑内には大形の石が落ち込んだ状態で入っており、これは本来墓坑の上に置かれていた標石と思われる。出土遺物はなかった。

(8) 8号墓

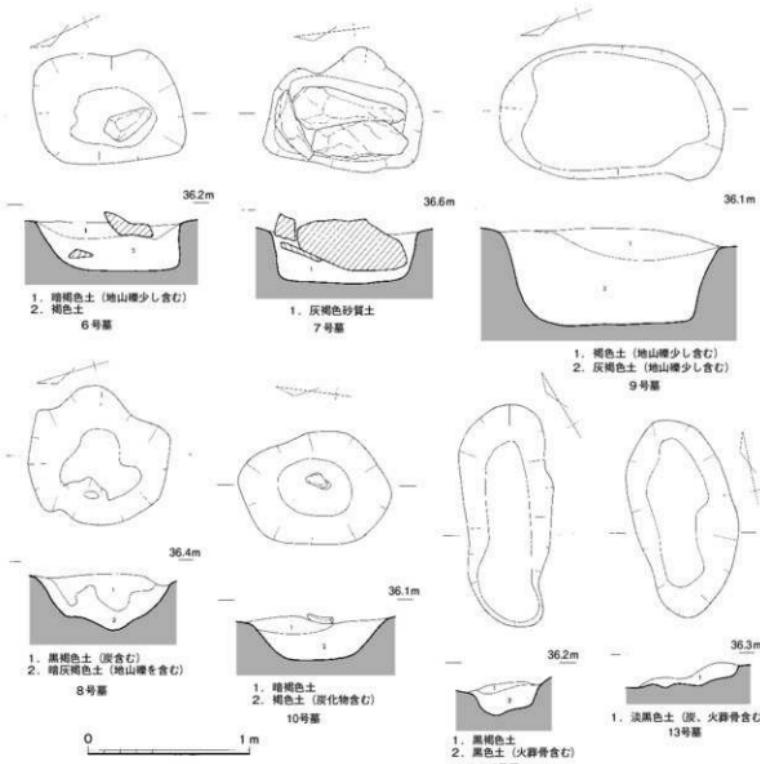
平坦面の北半部にあり、4号墓の南1.2m、6号墓の北2.0mに位置する。

不整形な円形をした小形の土坑で、径0.85m・深さ0.35mである。埋土は上層より炭を含む黒褐色土（1層）・地山礫を含む暗灰褐色土（2層）の順に堆積する。火葬骨は確認されなかったが、埋土中に炭がかなり含まれていたことから、火葬墓の可能性が考えられる。出土遺物は見られなかった。

(9) 9号墓

平坦面の北半部にあり、5号墓の南東1.5m、6号墓の北西1.5mに位置する。

平面が梢円形をした土葬墓で、長径1.4m・短径0.82m・深さ0.6mである。埋土は上層より地山礫を少し含む褐色土（1層）・地山礫を少し含む灰褐色土（2層）の順に堆積する。遺物は検出されていない。



第21図 6~10・12・13号墓遺構実測図 (S = 1 / 30)

(10) 10号墓

平坦面の中央部にあり、2号墓の西に隣接し、1号墓の北1.2mに位置する。

平面が楕円形をした土葬墓で、長径0.95m・短径0.7m・深さ0.25mである。埋土は上層より暗褐色土（1層）・炭化物を含む暗褐色土（2層）の順に堆積する。1層の上には標石と見られる15cm大の石があるが、内部から遺物は検出されていない。

(11) 11号墓

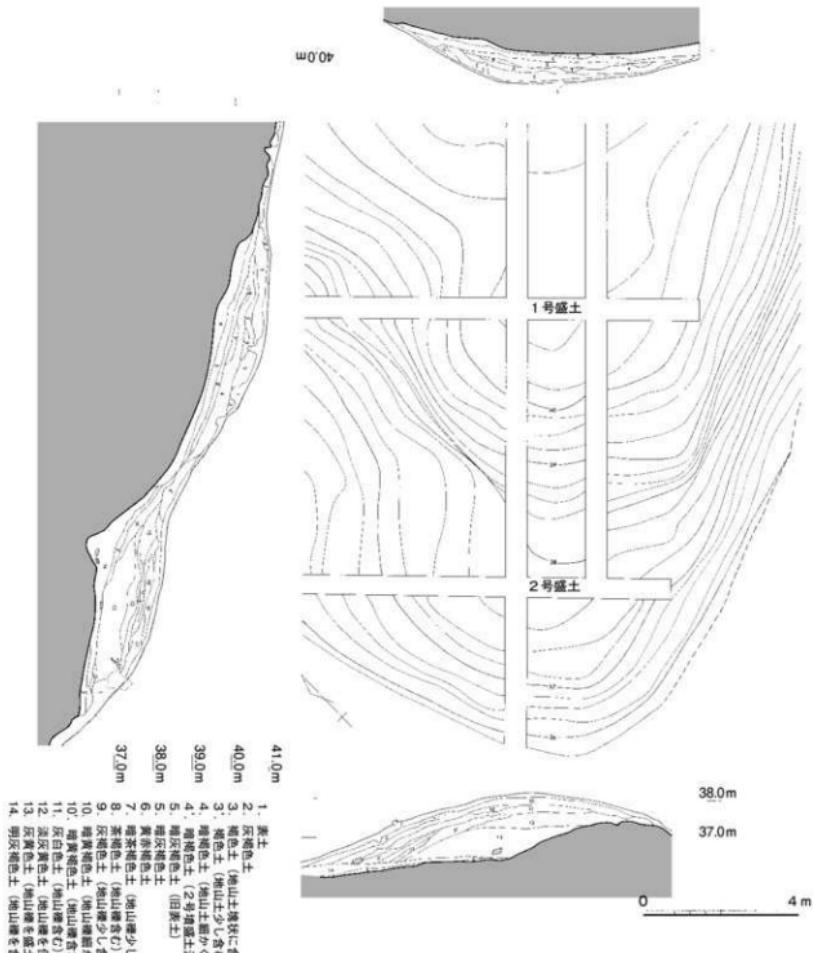
古墓群の中では最も南にあるもので、丘陵斜面から平坦面にかけて盛土遺構の下で検出された。

盛土遺構は丘陵頂部側から2ヶ所が認められ、順に1号盛土・2号盛土とした。1号盛土は、南北7.5m・東西7.0m・高さは厚いところで1.0mある。旧表土である暗灰褐色土（5層）の上に灰褐色土（2層）・褐色土（3層）・暗褐色土（4層）・暗茶褐色土（7層）・茶褐色土（8層）が互層状に盛土されているが、旧表土面や盛土中では遺構は確認できなかった。

2号盛土は1号盛土との前後関係は不明であるが、斜面をL字形に加工した平坦面の上に盛土されている。その直下に11号墓が営まれており、2号盛土は11号墓に伴う盛土と考えられる。盛土は

南北9m・東西6m・高さは厚いところで1.7mある。盛土の上半部は暗灰褐色土(5層)・暗黄褐色土(10層)・灰白色土(11層)・淡灰黄色土(12層)が互層状に見られるが、下半部は灰黄色土(13層)が厚く盛られており、11号墓はその下層の明灰褐色土(14層)に覆われていた。

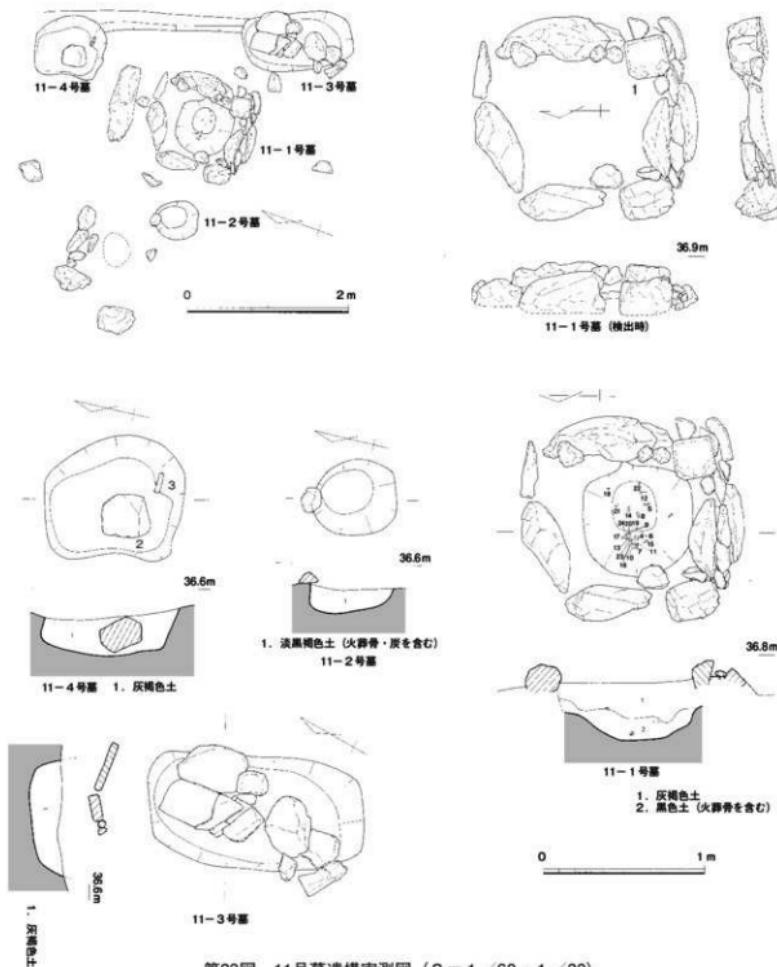
2号盛土の下面で検出された11号墓は、11-1号墓～11-4号墓の計4基の古墓よりなる。11-1号墓は方形の基壇をもつ火葬墓で、基壇は南北1.4m・東西1.25mで、高さは0.3mである。基壇は1段の列石よりなるが、南東隅には五輪塔地輪が置かれていた。基壇の内部には、灰褐色土(1



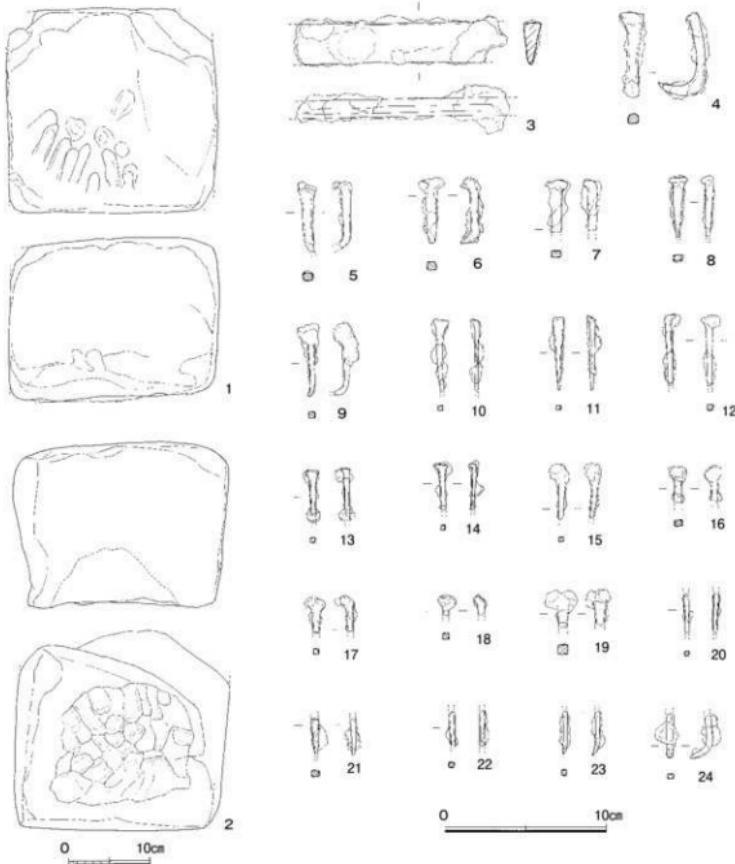
第22図 1号盛土・2号盛土遺構実測図 (S = 1 / 125)

層)が入っており、底面に一辺65cm・深さ20cmほどの土坑が掘り込まれている。土坑の埋土は黒色土(2層)で、内部からは火葬骨・鉄釘・銅銭片が出土している。11-2号墓は、11-1号墓の西0.5mのところに営まれた火葬墓である。梢円形を呈する墓坑は、長径50cm・短径45cm・深さ15cmである。埋土は淡黒褐色土(1層)で、炭と火葬骨が検出されている。

11-3号墓と11-4号墓は平坦面の山側に営まれており、浅い溝で繋がっている。11-1号墓との距離は11-3号墓が東0.5m、11-4号墓が北1.0mである。11-3号墓は平面が長方形をした土



第23図 11号墓遺構実測図 ($S = 1/60 \cdot 1/30$)



第24図 11号墓出土遺物実測図 (S=1/6・1/3)

葬墓で、長さ1.32m・幅0.7m・検出面からの深さは0.2mである。墓坑の上部には標石として石が置かれており、埋土は灰褐色土（1層）である。遺物は検出されていない。11-4号墓は平面が不整な方形をした土葬墓で、長さ0.85m・幅0.7m・検出面からの深さは0.25mである。墓坑の埋土は灰褐色土（1層）で、内部より五輪塔地輪と鉄刀片が出土している。

第24図1・2は五輪塔地輪である。1は一辺25.0cm・高さ20.0cmで、上面に加工痕が残る。2も一辺25.0cm・高さ20.0cmであるが、下面には深さ6.5cmの削り込みが見られる。

3は鉄刀の刃部片である。長さは現状で13.0cm・幅2.3cm・厚さは1.0cmである。

4～24は鉄釘である。曲がりや欠損のあるものが多いが、4のように長さ6.5cm・幅0.8cmと大きいものと、11のように長さ4.5cm・幅0.6cmと小さいものが見られる。

(12) 12号墓

平坦面の北端部にあり、4号墓の西、13号墓の南に隣接する。

平面は不整な長楕円形をした火葬墓で、長径1.35m・短径0.5m・深さ0.2mである。埋土は上層より黒褐色土（1層）・黒色土（2層）の順に堆積しており、2層から火葬骨が出土している。

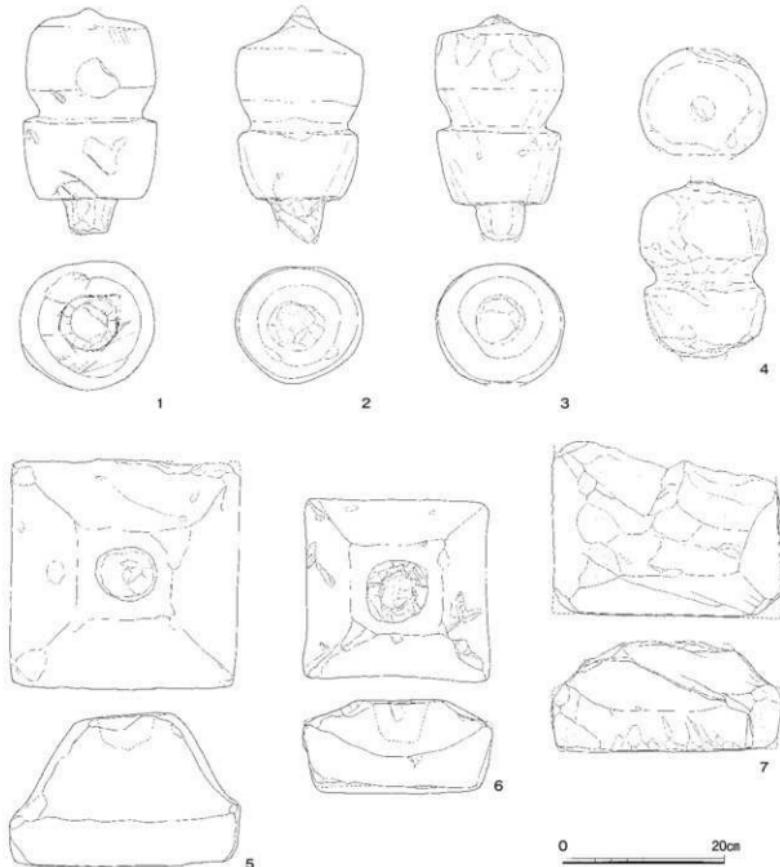
(13) 13号墓

平坦面の北端部にあり、4号墓の西、12号墓の北に隣接する。

平面は不整な長楕円形をした火葬墓で、長径1.2m・短径0.6m・深さ0.1mである。埋土は淡黒色土（1層）のみで、火葬骨が出土している。

(14) 遺構に伴わない五輪塔

第25図1～4は空風輪である。1は空輪が宝珠形を呈するもので、高さ23.0cm・空輪径16.0cm。

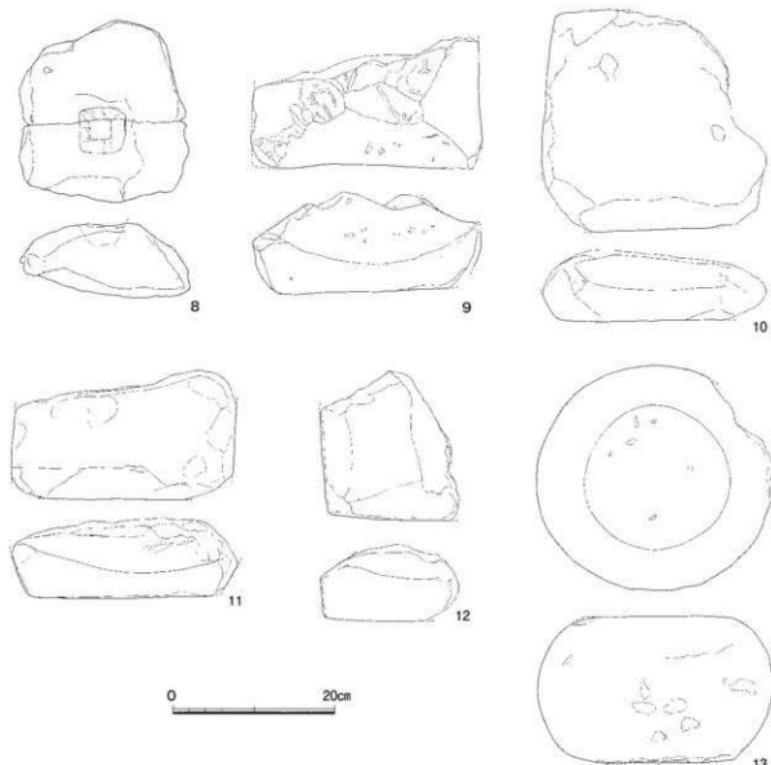


第25図 遺構に伴わない五輪塔実測図1 (S = 1 / 6)

風輪径16.5cmである。下端の柄は径7.0cm・高さ4.5cmである。2も空輪が宝珠形を呈するが端部のも突起が大きい。高さは現状で27.5cm・空輪径16.5cm・風輪径15.0cmである。下端の柄は径7.0cm・高さ5.5cmである。3は空輪が宝珠形を呈するもので、高さ27.5cm・空輪径15.5cm・風輪径15.0cmである。下端の柄は径6.0cm・高さ4.5cmである。4は両端を欠損するが、現状で高さ21.5cm・空輪径15.5cm・風輪径15.0cmである。

5～12は火輪である。5は一辺28.0cmの方形で、高さ18.5cm、頂部に径6.5～7.5cm・深さ4.5cmの柄穴が設けられる。6は一辺22.0～23.0cmの方形で、高さは11.5cm、頂部に径7.5cm・深さ5.0cmの柄穴がある。5に比較して高さが低く、四隅のかえりが大きい。7は一辺28.0cmの方形で、高さは現状で13.5cmである。8は頂部の破片で、一辺5.5cm・深さ3.0cmの方形をした柄穴が設けられる。9は一辺28.0cmで、四隅のかえりが大きい。10は一辺27.0cm・現状で高さ8.5cmである。11は一辺27.5cm・現状で高さ9.5cmである。12は隅部の破片で、高さは現状で9.5cmである。

13は水輪である。径29.0cm・高さ18.0cmで、下面に僅かに窪みが見られる。



第26図 遺構に伴わない五輪塔実測図2 (S = 1 / 6)

第4節 土 坑

(1) 1・2号土坑

丘陵鞍部南側に位置する土坑で、西側の大形土坑を1号、東側の不整形な落込みを2号とした。

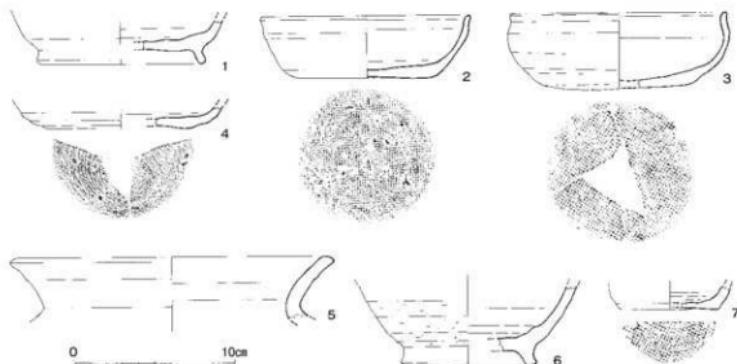
1号土坑は長さ3.2m・幅2.7m・深さ0.45mほどのものである。埋土は上層より暗灰褐色土(1層)・淡黒褐色土(2層)・灰褐色土(3層)が堆積し、上面を中心須恵器壺・甕・壺などが出でた。

第28図1は高台付壺で、底面に切り離し痕は残さない。2~4は無高台の壺身で、2・3は口縁が緩く括れており、底面は回転糸切りである。5は口縁が外反する甕で、自然釉がかかる。6は高台付きの壺底部で、外面には回転ヘラケズリが施される。7は小形壺の底部で、回転糸切り痕が残る。

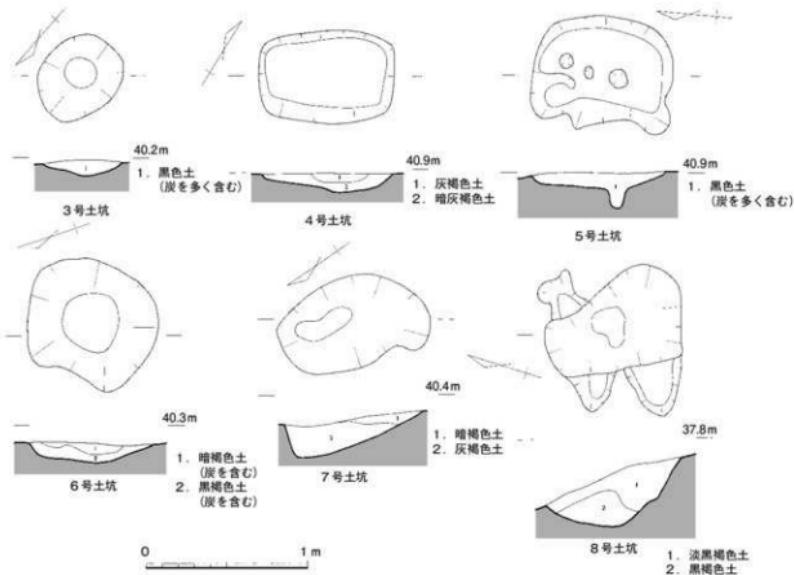
2号土坑は、長さ4.3m・幅1.3mの範囲に掘られた不整形な落込みである。中央部では深さ0.3



第27図 1号土坑・2号土坑遺構実測図 (S = 1 / 60)



第28図 1号土坑出土遺物実測図 (S = 1 / 3)



第29図 3～8号土坑遺構実測図 (S = 1 / 30)

mほどで、上層より暗灰褐色土（1層）・灰褐色土（2層）が堆積する。

(2) 3号土坑

丘陵鞍部北側に位置する土坑である。円形をした浅い皿状を呈し、径45～50cm・深さ10cmである。埋土は炭を多く含んだ黒色土である。

(3) 4号土坑

丘陵頂部南側に位置する土坑である。長方形を呈し、長さ83cm・幅58cm・深さ12cmである。埋土は上層より灰褐色土（1層）・暗灰褐色土（2層）が入る。

(4) 5号土坑

丘陵頂部西側に位置する土坑である。不整な長方形を呈し、長さ85cm・幅65cm・深さ10cmである。底面には深さ11cmほどの小ビットがあり、埋土は炭を含む黒色土である。

(5) 6号土坑

丘陵頂部西側に位置する土坑である。不整な円形を呈し、径80cm・深さ12cmである。埋土は炭を含み、上層より暗褐色土（1層）・黒褐色土（2層）の順に堆積する。

(6) 7号土坑

丘陵頂部北側に位置する土坑である。不整な楕円形を呈し、長径95cm・短径56cm・深さ18cmである。埋土は上層より暗褐色土（1層）・灰褐色土（2層）の順に堆積する。

(7) 8号土坑

丘陵北側斜面に位置する土坑である。不整なもので、長径85cm・短径60cm・深さ38cmである。埋土は上層より淡黒褐色土（1層）・黒褐色土（2層）の順に堆積する。

第5章 II 区の調査

(1) 炭溜まり 1

II区の東端に位置し、南北5m、東西8m以上の平面楕円形を呈する。中央部の深さは40cmであり、炭片を多く含む黒灰色土が堆積し、中央部から端部にかけて緩やかに立ち上がっている。この黒灰色土には後述する遺物の他に、黄灰色の礫片が多く含んでいた。また9号土坑、10号土坑が炭溜まりの南端付近で検出されている。

第35図1は輪状つまみを持つ蓋で、端部は垂直に垂下している。2も輪状つまみを持つ蓋であるが、端部は内面下方に垂下している。3は端部に受け部を持つ壺の底部で、外面に「キ」字状のヘラ記号、内面に一字文字状の痕跡（ヘラ記号？）が施されている。4は高台が付く壺で、底部は静止系切りと考えられる。5はやや小ぶりの壺で、口縁部の立ち上がりはやや直線的である。6、7は壺の底部であり、底部の切り離しについて、6は静止系切り、7は回転系切りと考えられる。8は高壺の筒部で、透かし孔が施されているが、上半は線刻のみである。また壺部との接合部分に「×」状の痕跡があり、壺底部外面にヘラ記号が施されていた可能性がある。9、10は小型の壺である。底部切り離しは、9はヘラ切り、10は自然釉のため不明である。底部の形状は、9が中心付近がやや外側に張り出す状況になっているのに対し、10はきれいな平坦面になっている。また10は器壁が薄く一定しており、焼成が良く、固く締まった感がある。10の口縁端部内部には焼成時に他の個体の一部と考えられる胎土が溶着している。11、12は甌と考えられる。11は口縁端部で、外面に格子状、内面に同心円状の工具痕がある。12は底端部と考えられる。ともに灰白色の色調を呈しており、やや軟質である。13は須恵質土馬の頭部から頸部にかけての部分である。目及び鼻孔は細い竹管状の工具で、口はヘラもししくは棒状の工具で表現されていると考えられる。土馬の右半身部分は風化しているが耳にあたる部分はややふくらんでおり、欠損している左耳部分は不明であるが、本来は両耳が表現されていた可能性も考えられる。14は長颈瓶であり、胴部下方にはタタ



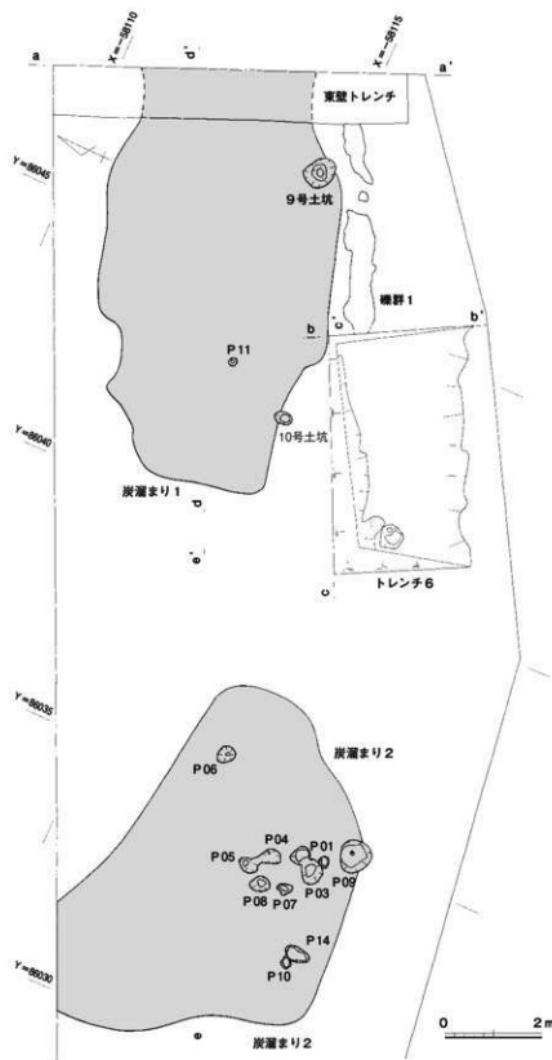
第30図 調査II区遺構配置図 (S = 1/200)

キによる工具痕が残っている。また底部内面には高台部分を接合したときの指頭圧痕が残っている。15~17は鉢と考えられる。15、16は口縁端部付近、17は胴部と考えられる。17の内面の一部には工具痕と考えられる痕跡が残っている。18は器種不明の高台部分である。色調は灰白色で、やや軟質である。この他にも須恵器・甕類の破片、土師器の壊または皿の破片、甕片、移動式竈の一部と思われる破片などが出土している。土師器の壊または皿の破片には、赤彩土師器が含まれていた。

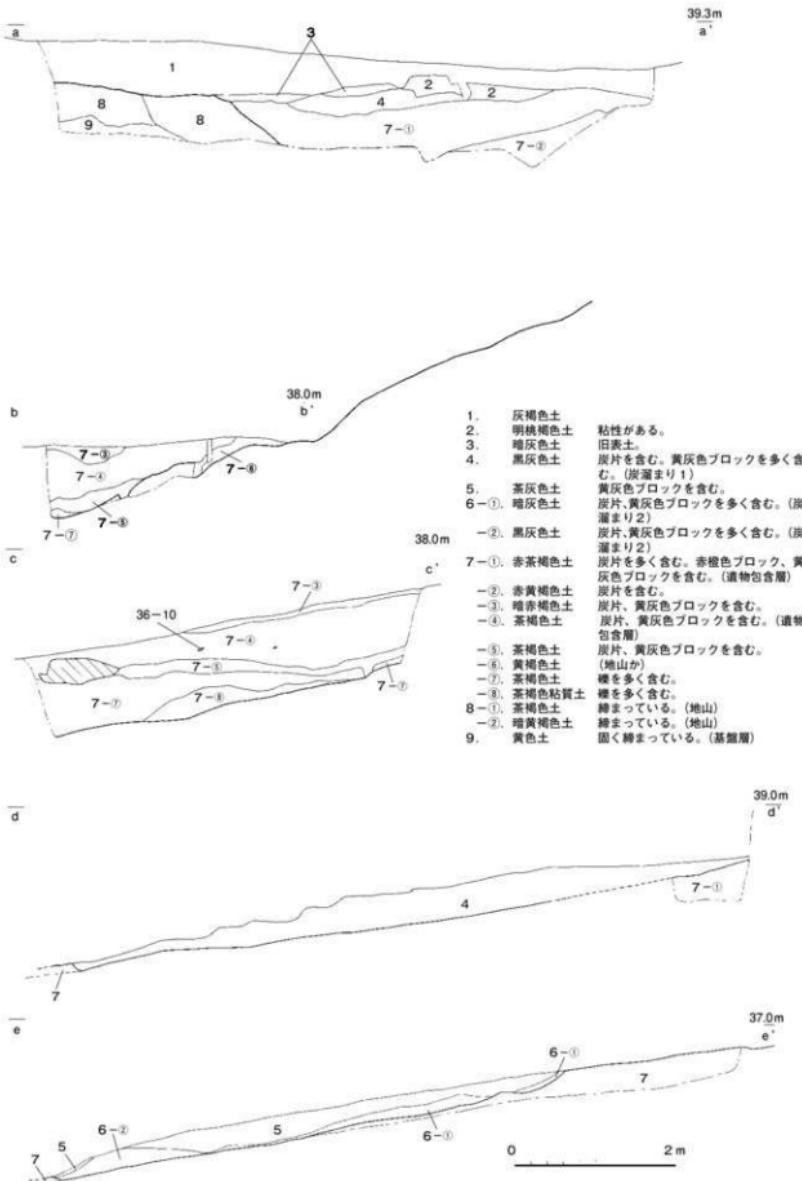
(2) 炭溜まり 2

炭溜まり 1 の西 4 m に位置し、南北 6 m 以上、東西 7 m、平面形は楕円を歪めたような形状をとる。深さは 30 cm であり、中央部から端部にかけて緩やかに立ち上がってい。埋土は 3 層に分かれしており、炭溜まり 1 同様炭片、黄灰色礫片を多く含んでいる。上層は茶褐色土（第32図 5層）で、柱列 1 ~ 3 は 7 層上面で検出された。5 層と 7 層間の一部には暗灰色土（第6-①層）、黒灰色土（第6-②層）が堆積している。第6-①層は柱列 1 ~ 3 の埋土であり、第5 層は後世の擾乱部分と考えられる。また第6-②層については柱列 1 ~ 3 に伴う造成土の可能性が考えられる。

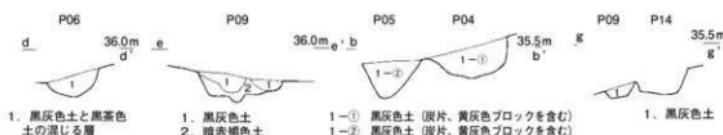
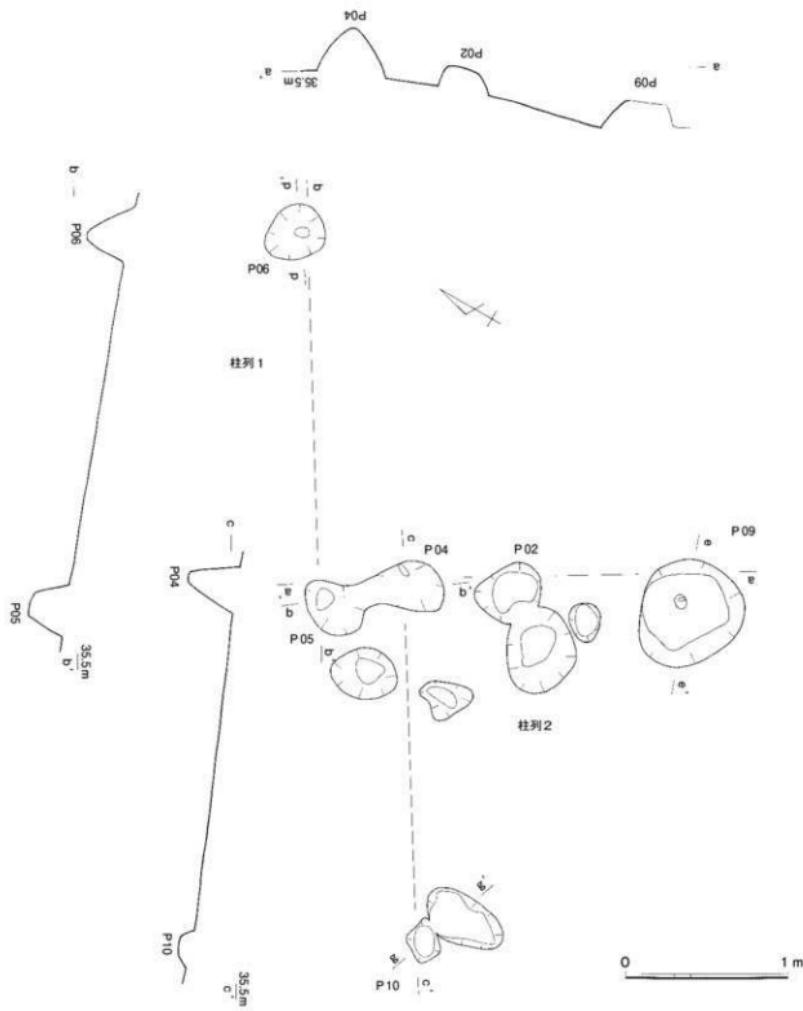
遺物は須恵器（36-1 ~ 5）、土師器（36-6）が出土している。1、2 は壊である。3 は小型の



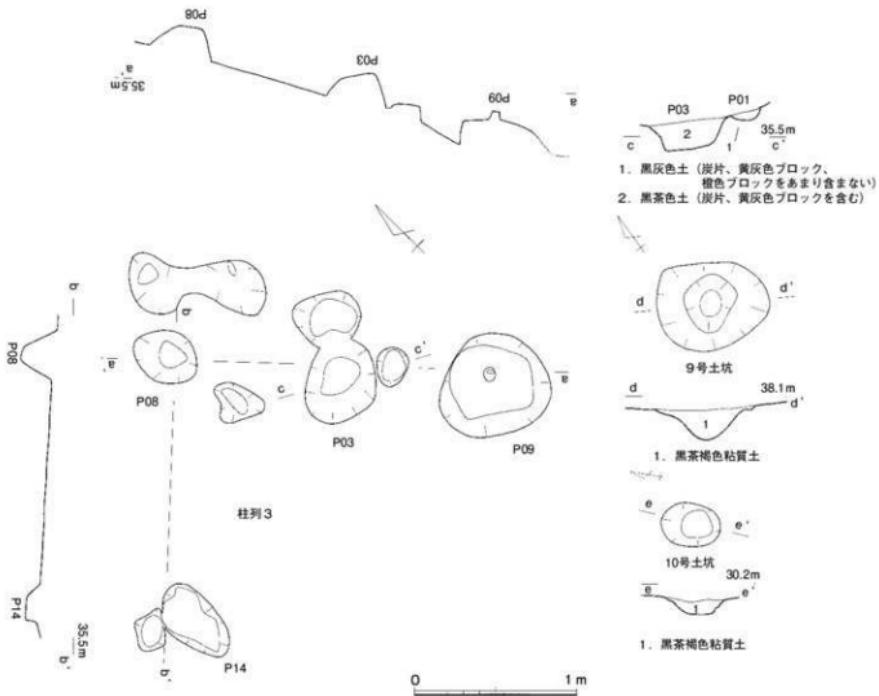
第31図 炭溜まり 1・炭溜まり 2 平面図 (S = 1 / 100)



第32図 トレンチ・炭溜まり1・炭溜まり2土層図 (S = 1 / 60)



第33図 柱列1・柱列2実測図 ($S = 1/30$)



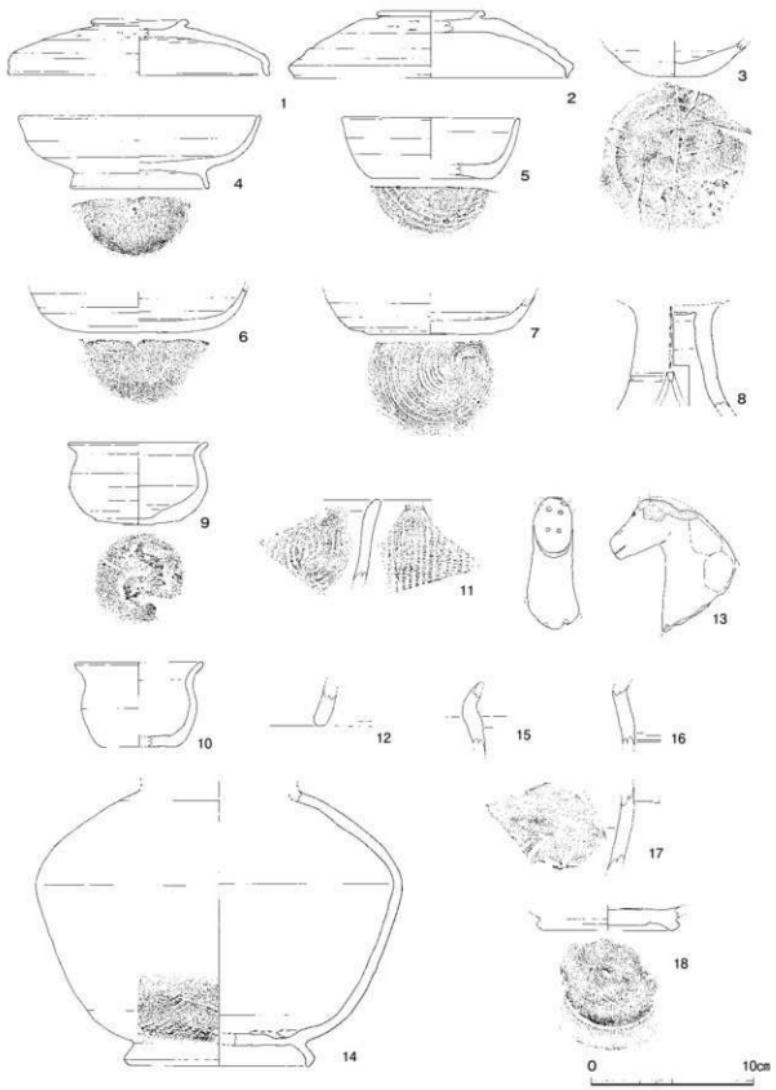
第34図 柱列3実測図 ($S = 1/30$)

壺もしくは灯明皿で、底部は回転系切り、また底部の内外面の一部に黒色部分が確認される。4は風化が激しく器種不明である。5も器種不明であるが壺の胴部の可能性が考えられる。外面にはタタキによる工具痕が残るが、内面は風化のため工具痕の確認はできない。6は土製支脚である。またこの他にも、須恵器の裏片、土師器の壊または皿の破片、裏片などが出土している。壊もしくは皿には高台が付き、赤彩が施されているものも含まれている。

(3) 柱列1・柱列2

炭溜まり2部分で検出された。炭溜まり部分の埋土（第6—①層）が、柱列構築以前から存在していたか、柱列にともなったものかは不明である。柱列1のP05—P06間は2.2m、柱列2のP04—P10間は2.2m、P04—P02—P09間はそれぞれ0.7m、1.0mである。ビットの埋土は黒灰色土で炭片、黄灰色礫片を含んでいる。

P02から須恵器片、土師器片、P04から底部糸切り痕のある須恵器片、土師器片、P09から須恵器の裏片、P10から糸切り痕のある須恵器・壊の底部が出土している。

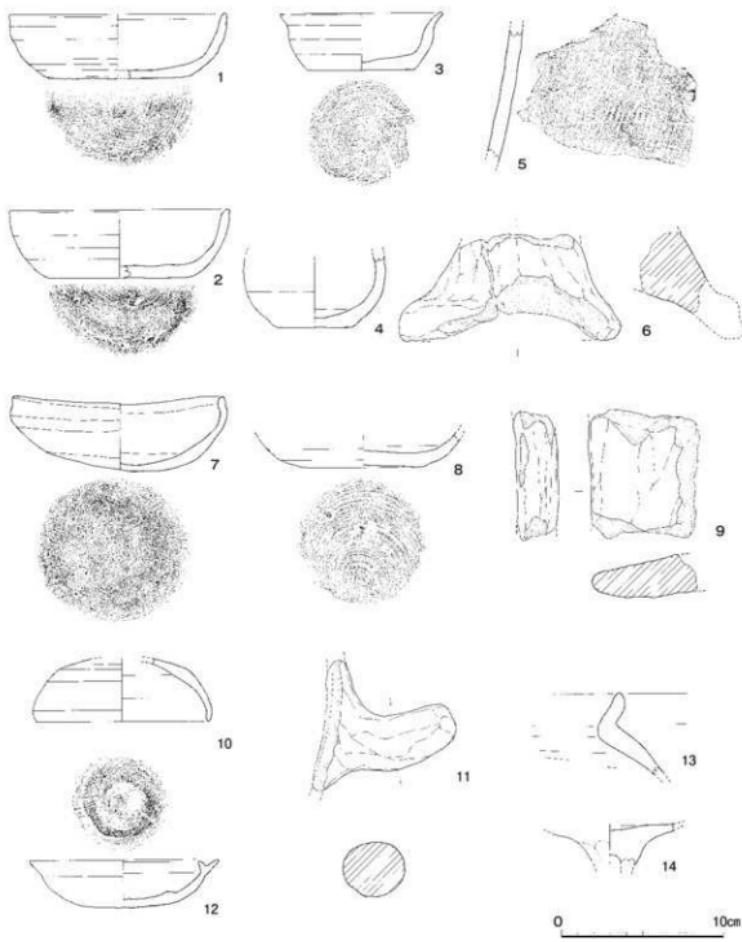


第35図 炭埋まり1出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

(4) 柱列3

柱列2とほぼ同じ位置で検出された。P08-P14間は、1.6m、P08-P03-P09間はそれぞれ1.0m、0.9mである。ピットの埋土は黒茶色土で、炭片、黄灰色礫片を含む。P09の土層の観察より、柱列3の後に柱列2が建てられている。

P14から須恵器(36-8)、土製品(36-9)などが出土している。8は壺の底部で切り離しは



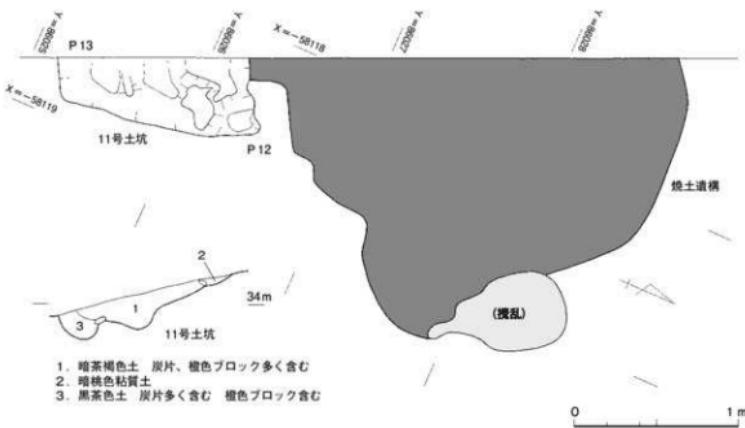
第36図 柱列1～3及びトレンチ出土遺物実測図 (S = 1/3)

回転糸切りである。9は移動式竈の一部と考えられる。その他土師器の壊もしくは皿の破片が出土している。またP03から糸切りの須恵器・壺の底部、土師器片が出土している。

(5) トレンチ6・東壁トレンチ

トレンチ6は鉄塔脚敷設部分に、東壁トレンチは調査II区東端に設定した。

トレンチ6では調査I区から続く斜面の延長上に地山面が続いており、谷の中央付近に位置するほど第7層が厚く堆積している。第7層から須恵器(36-10)及び土師器(36-11)が出土している。10は須恵器の蓋で、11は土師器・壺の把手部分である。



第37図 焼土遺構・11号土坑実測図 ($S = 1/30$)

東壁トレチの北端では、表土下60cmで地山を確認したが、中央部から南端にかけては、炭溜まり1埋土である第4層の下に古墳時代後期の遺物包含層（第7層）が50cm以上堆積しており、地山を確認するには至らなかった。この第7層は炭片を僅かに含み、また礫片を多く含んでいる。この第7層からは須恵器（36-12）、土師器（36-13、14）が出土している。13は壺であり、内面に「×」のヘラ記号が施されている。13は壺の口縁部、14は高壺の壺底部である。

第7層は炭片、黄灰色礫片を含む古墳時代後期の遺物包含層である。整地など人為的な堆積でなく、比較的短期間の自然堆積と考えられる。山崩れなどの自然災害が起こった可能性が考えられる。

(6) 9号土坑・10号土坑

9号土坑は調査区東端付近に位置し、長軸70cm、短軸60cmの平面楕円形を呈し、深さは20cmである。埋土は炭片、黄灰色礫片を含む黒灰色土であり、遺物は出土していない。また炭溜まり1の上層から掘り込まれている。

10号土坑は調査区東より、9号土坑の西5mに位置し、長軸40cm、短軸20cmの平面楕円形を呈し、深さは10cmである。埋土は9号土坑同様炭片、黄灰色礫片を含む黒灰色土であり、遺物は出土していない。また9号土坑同様、炭溜まり1の上層から掘り込まれていると考えられる。

(7) 磕群1

調査区東端の炭溜まり1の南に位置する。地山もしくは第7層上面の、長さ4m以上、幅50cmの範囲に拳大の磕が地山もしくは第7層上面に食い込むような状況で検出された。道の可能性が考えられるが、時期等は不明である。

(8) 焼土遺構・11号土坑

調査区北端の中央部に位置し、北半分は調査区外に広がっている。焼土遺構検出状況は、地山もしくは7層上面の直径2.5mの平面範囲が、赤褐色に変色した状態であった。比熱を受けたためと

考えられる。焼土遺構の西隣、斜面の下方に11号土坑が位置する。埋土は全体的に炭片を多く含み、前後関係は不明であるがP12及びP13が重複していると考えられる。焼土遺構及び11号土坑部分は近世以降の炭窯だった可能性が考えられる。

第6章 遺構に伴わない遺物

第38～41図は遺構に伴わない遺物である。

1～54は須恵器である。1は蓋、2、3は壺である。2は底部から口縁部へ立ち上がる部分に屈曲点がある。4～7は輪状つまみを持つ蓋である。4は口縁端部が垂直に垂下し、5はやや内側に垂下している。

8～34は壺である。口縁端部は緩く括れるものが多いが、あまり括れず内湾するもの（8、9、16、24、25）、緩く直線的に外傾するもの（19、23）など様々である。底部切り離しが確認できる壺の大半が回転糸切りと考えられるが、16、22、25、34は静止糸切りと考えられる。19は焼成前に高台を付けようとした可能性がある。23は他の壺に比べ底部から口縁部にかけての立ち上がりがやや直線的であり、口縁端部はやや外反する。24、25は他の壺に比べ法量が大きくなっている。また25に関しては、底部がやや丸みを帯び、口径に比べ器高が大きく、底部から口縁部にかけて大きく内湾している。26、27は焼成時、もしくは焼成前に大きく変形し、歪んだと考えられる。34は底部外周から体部下半にヘラケズリ調整が施されている。35、36は高台が付く壺である。37は蓋の破片と考えられるが、内面に炉壁材と思われる物質が溶着している。

38、39は小型の壺である。40は咲とを考えられる。41、42は灯明皿であり、41の外面は自然釉の付着が甚だしい。43～46は高台が付く長頸壺である。43は自然釉の付着が甚だしい。47は鉄鉢形土器である。48、49は壺の底部であり、底部に糸切り痕が残る。50は器種不明の把手部分である。内面に当て具痕が確認できる。51は壺であり、外面に平行状のタタキ痕、内面に同心円状の当て具痕が残る。また焼成時に付着したと考えられる粘土が口縁部内面に付着している。52、53は横瓶である。53は外面に直径8.7cmの焼き台の痕跡があり、焼き台部分以外に自然釉が付着している。54は鉢の口縁部である。外面に格子状のタタキ痕、内面に同心円状の当て具痕が残っている。

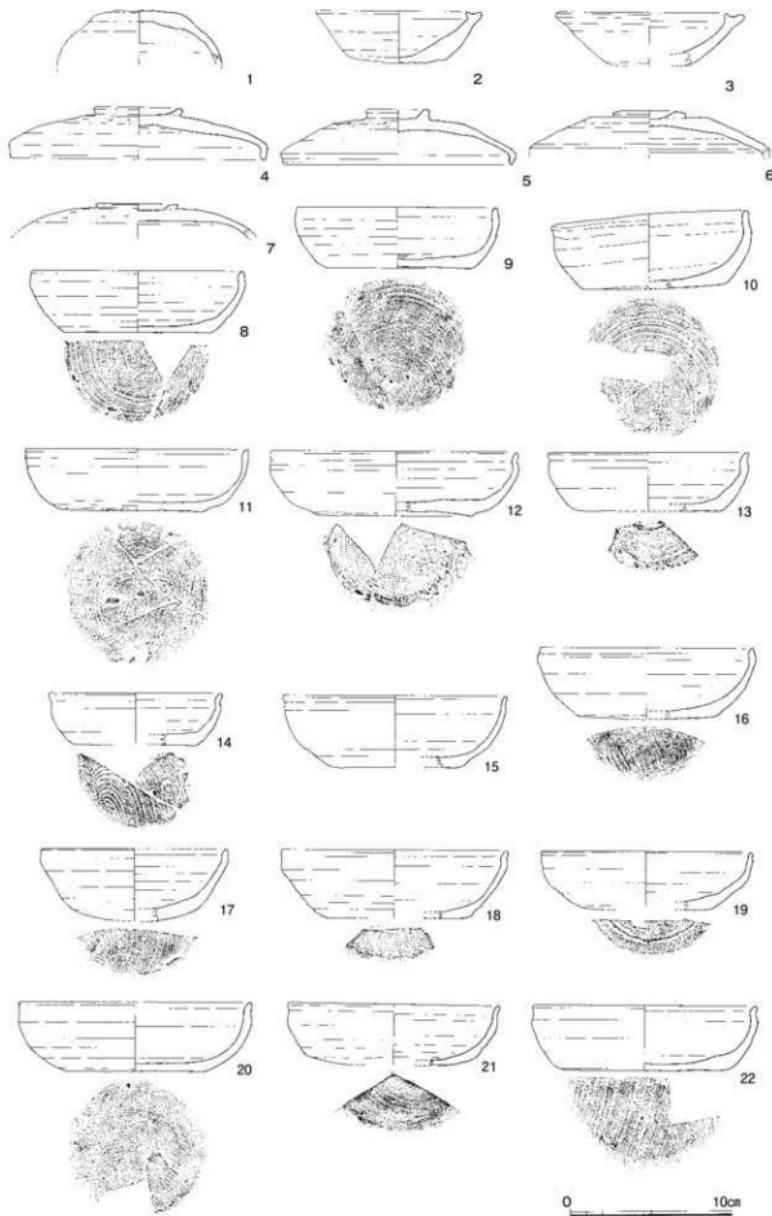
55～57は土師器である。55は壺で底部はヘラ切りである。56は手捏土器である。外面に黒斑部分、内面に指頭圧痕が確認できる。57は甕の口縁部である。

58は瓦質土器の裏・底部である。外面に格子状のタタキ痕がある。

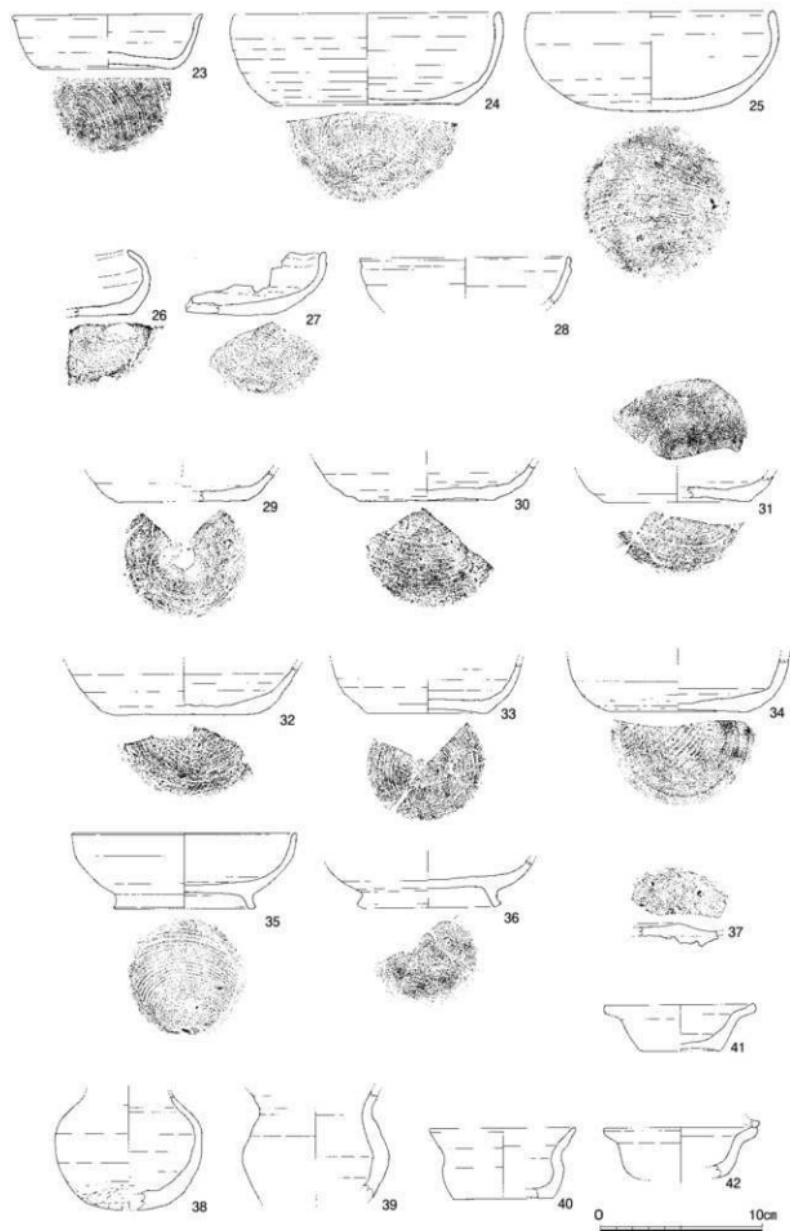
59～61は土製支脚である。59、60は底部内面を削り取っているが、61は平坦である。

62、63は輸入陶磁である。62は龍泉窯系青磁である。外面に蓖状工具による蓮弁文、内面には蓖状工具による文様が施されている。上田B類と思われる。63は粗製の青花と考えられる。内面にシダ文様が施され、底部は削りだし高台で、高台内面及び置付けは基本的には無釉であるが一部に釉薬が流れ込んでいる。

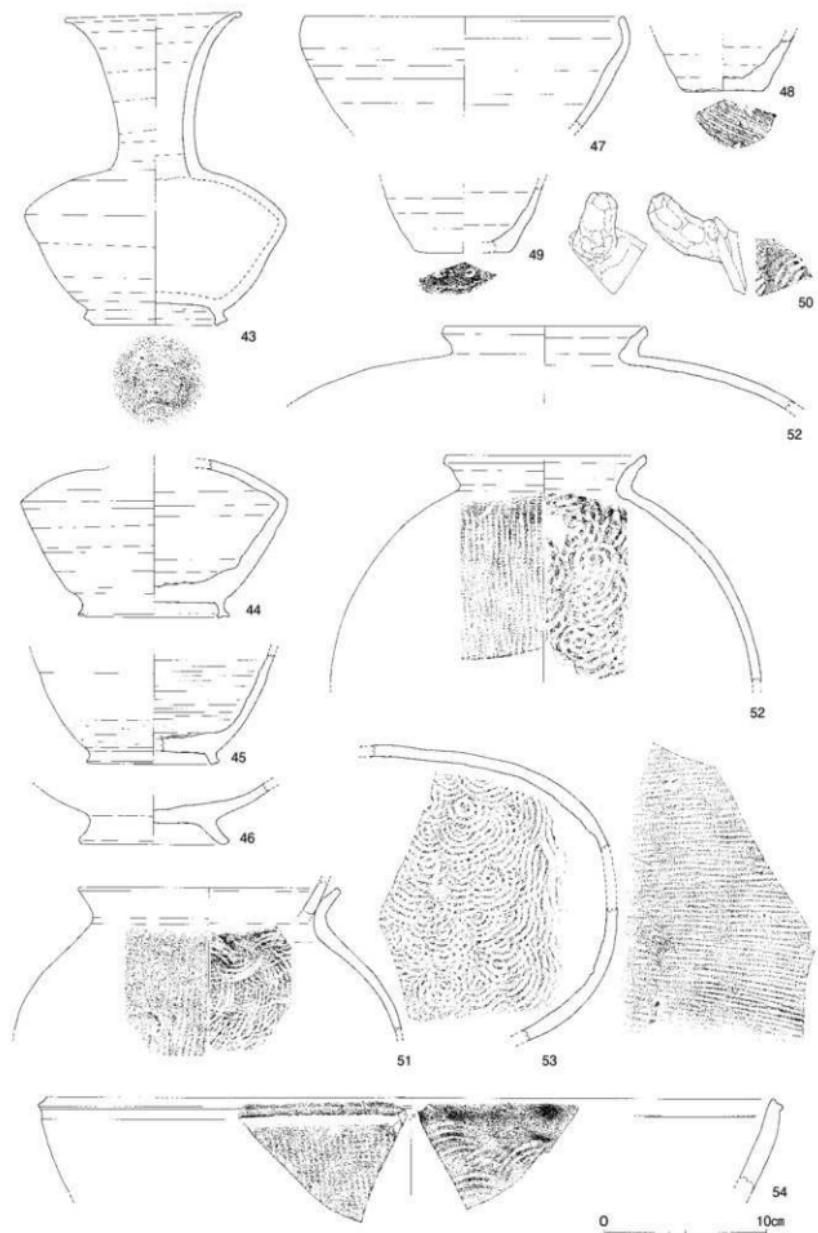
64は砂岩製の石材であり、石塔部材の一部の可能性が考えられる。



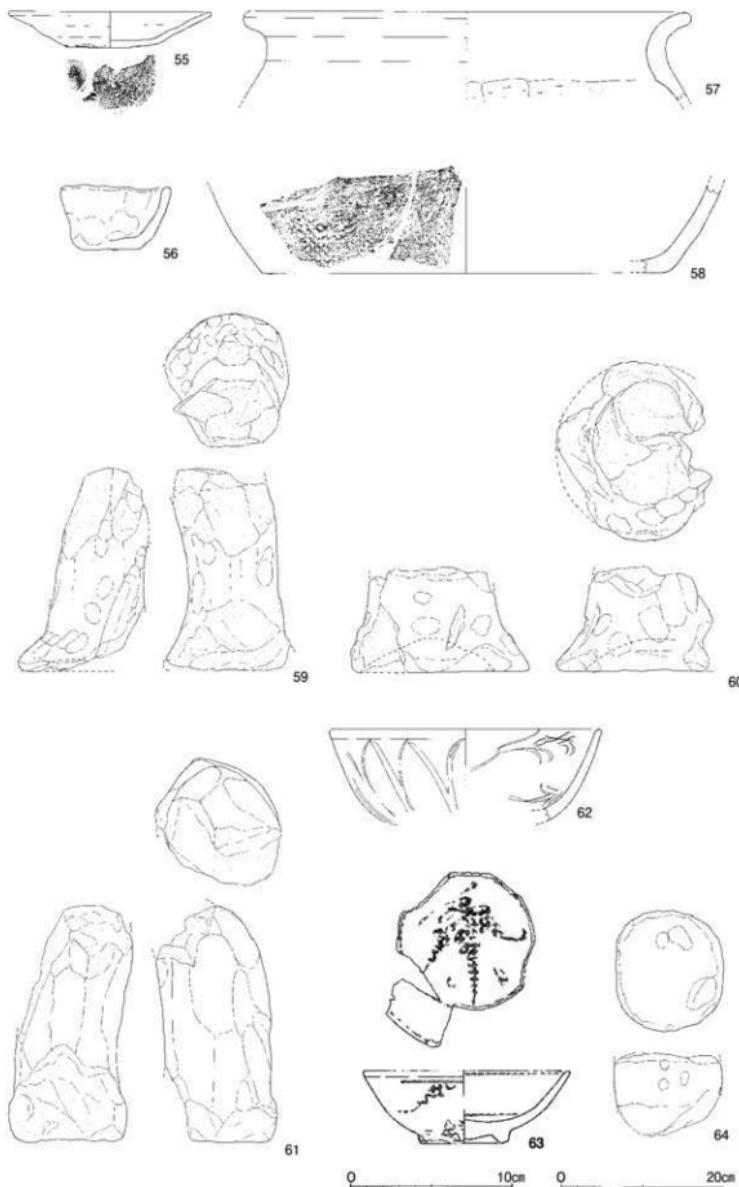
第38図 遺構に伴わない遺物実測図1 (S = 1 / 3)



第39図 遺構に伴わない遺物実測図2 (S = 1 / 3)



第40図 遺構に伴わない遺物実測図3 (S = 1 / 3)



第41図 遺構に伴わない遺物実測図4 (S = 1/3・1/6)

三大寺遺跡出土土器観察表

地盤 番号	出土地点	種別	基種	口径 (cm)	周高 (cm)	調整・手法の特徴	胎 土		焼成	色 調	備 考
							外削	内削			
5-1	1号土坑	須恵器	真环	—	—	外削：回転ナード・ハケメ 内削：回転ナード	需	良好	外削：青灰色 内削：灰白色		
8-1	1号建物跡	須恵器	环	(13.0)	—	外削：回転ナード・回転ハラケアリ 内削：回転ナード	需	良好	青灰色		
8-2	1号建物跡	須恵器	环	(13.0)	4.4	外削：回転ナード・回転ヘラ切らか 内削：回転ナード・回転ヘラ切らか	需	良好	外削：灰色 内削：灰白色	表面に垂れ流きの痕跡 内削に両台内削に自然輪	
8-3	1号建物跡	須恵器	环	(17.0)	5.6	外削：回転ナード・回転ぬ切り 内削：回転ナード	2mm以下の砂粒含む	良好	灰色		
8-4	1号建物跡	須恵器	环	(12.0)	—	外削：回転ナード・回転ぬ切り 内削：回転ナード・ナード	2mm以下の砂粒含む	良好	灰色		
8-5	1号建物跡	須恵器	环	12.5	4.4	外削：回転ナード・回転ぬ切り 内削：回転ナード・ナード	2mm大の長石含む	良好	青灰色		
8-6	1号建物跡	須恵器	环	12.6	4.6	外削：回転ナード・静止ぬ切りか 内削：回転ナード・ナード	細かい砂粒含む	良好	外削：青灰色～暗青灰色 内削：暗紅灰色	表面に垂れ焼きの痕跡	
8-7	1号建物跡	須恵器	环	13.6	3.8	外削：回転ナード・回転ぬ切り 内削：回転ナード・ナード	2mm以下の砂粒含む	良好	外削：暗褐色～灰白色 内削：灰白色	表面に垂れ焼きの痕跡	
8-8	1号建物跡	須恵器	环	(13.0)	4.2	外削：回転ナード・回転ぬ切り 内削：回転ナード	2mm以下の砂粒含む	良好	青灰色		
8-9	1号建物跡	須恵器	环	13.8	3.7	外削：回転ナード・回転ぬ切り 内削：回転ナード	1mm以下の砂粒含む	やや不良	外削：紫褐色～淡褐色 内削：明褐色		
8-10	1号建物跡	須恵器	环	12.7	4.2	外削：回転ナード・回転ぬ切り 内削：回転ナード・ナード	4mm大までの石粉含む	良好	青灰色		
8-11	1号建物跡	須恵器	环	13.3	4.0	外削：回転ナード・回転ぬ切り 内削：回転ナード・ナード	1mm以下の砂粒含む	良好	外削：暗灰色 内削：暗紅灰色	全体的に焼き走んでいる 内削に焼きぶくれあり	
8-12	1号建物跡	須恵器	环	(13.5)	4.0	外削：回転ナード・回転ぬ切り 内削：回転ナード・ナード	2mm以下の白色粉を少々含む	やや不良	外削：明褐色～紫褐色 内削：明褐色		
8-13	1号建物跡	須恵器	环	12.7	4.4	外削：回転ナード・回転ぬ切り 内削：回転ナード	5mm以下の砂粒含む	良好	外削：暗褐色～淡褐色 内削：灰白色	重ね焼きの痕跡	
8-14	1号建物跡	須恵器	环	14.1	4.3	外削：回転ナード・回転ぬ切りか～ナード 内削：回転ナード・ナード	1mm以下の砂粒を少々含む	やや不良	外削：暗褐色～灰白色 内削：灰白色	重ね焼きの痕跡	
8-15	1号建物跡	須恵器	环	(16.2)	5.8	外削：回転ナード・回転ぬ切り 内削：回転ナード・ナード	0.5mm大以下の砂粒を含む	良好	外削：灰褐色～灰白色 内削：灰白色		
8-16	1号建物跡	須恵器	环	12.1	—	外削：回転ナード・回転ぬ切り 内削：回転ナード・ナード	需	やや不良	外削：灰褐色～明褐色 内削：褐色～紫褐色		
8-17	1号建物跡	須恵器	环	—	—	外削：回転ナード・回転ぬ切り 内削：回転ナード・ナード	需	良好	外削：灰褐色 内削：青灰色		
8-18	1号建物跡	須恵器	环	—	—	外削：回転ナード・回転ぬ切り 内削：回転ナード・ナード	2mm大までの砂粒を少々含む	良好	青灰色		
9-19	1号建物跡	須恵器	环	—	—	外削：回転ナード・回転ぬ切り 内削：回転ナード・ナード	2mm以下の砂粒含む	良好	灰色		
9-20	1号建物跡	須恵器	环	—	—	外削：回転ナード・回転ぬ切り 内削：回転ナード・ナード	5mm以下の砂粒を少々含む	良好	灰色		
9-21	1号建物跡	須恵器	环	—	—	外削：回転ナード・回転ぬ切り 内削：回転ナード・ナード	需	良好	外削：暗青灰色 内削：淡褐色		
9-22	1号建物跡	須恵器	环	—	—	外削：回転ナード・回転ぬ切り 内削：回転ナード・ナード	4mmの大礫含む	良好	青灰色		
9-23	1号建物跡	須恵器	真环	—	—	外削：回転ナード・回転ハラケアリ～ナード 内削：回転ナード・ナード	需	良好	灰白色		
9-24	1号建物跡	須恵器	皿	17.4	2.0	外削：回転ナード・回転ハラケアリ～ナード 内削：回転ナード・ナード	2mm以下の砂粒含む	良好	灰褐色～紫褐色	重ね焼きの痕跡 底部中央は淡青灰色	
9-25	1号建物跡	須恵器	皿	(12.0)	3.0	外削：回転ナード・回転ハラケアリ～ナード 内削：回転ナード	1mm大以下の砂粒を少々含む	良好	灰白色		
9-26	1号建物跡	須恵器	分割	—	2.6	—	0.5mm大以下の砂粒含む	良好	灰褐色		
9-28	1号建物跡	須恵器	裏	(20.0)	—	外削：平行タキナード 内削：回転円筒内具側	需	良好	暗青灰色	当面絞り内削に暗がり有 筋内削で具側に残れる	
9-29	1号建物跡	土器類	裏	24.4	—	外削：機ナード・ハケメ 内削：機ナード・ケツアリ	1mm以下の砂粒含む	良好	外削：浅黃褐色～赤褐色 内削：浅黃褐色	外削に摩耗有 内削に黒色の付着物あり	
9-30	1号建物跡	土器類	裏	20.6	—	外削：機ナード・ハケメ 内削：機ナード・ケツアリ	4mmの石片含む	良好	淡褐色	外削に摩耗有	
9-31	1号建物跡	土器類	裏	—	—	外削：機研えか 内削：ナ・ケツアリ	1mm以下の砂粒含む	良好	にじい褐色		
9-32	1号建物跡	土器類	裏	—	—	外削：機研え 内削：ナ・ケツアリ	2mm大以下の砂粒含む	良好	にじい褐色		
9-33	1号建物跡	須恵器	横瓶	—	—	外削：回転ナード・平行タキナードのちかく 内削：回転ナード・同心内凹で具側	1mm大以下の砂粒含む	良好	外削：暗褐色～灰白色 内削：灰白色	側錠体の破片が消着する	
9-34	1号建物跡	須恵器	环	13.1	4.3	外削：回転ナード・回転ぬ切り 内削：回転ナード・ナード	需	良好	灰白色		
10-2	2号建物跡	須恵器	环	13.2	4.4	外削：回転ナード・静止ぬ切り 内削：回転ナード・ナード	3mm大以下の砂粒含む	良好	灰白色		
10-3	2号建物跡	須恵器	环	13.7	4.1	外削：回転ナード・回転ぬ切り 内削：回転ナード・ナード	4mm大以下の砂粒含む	良好	外削：紫褐色～淡褐色 内削：紫褐色		
10-4	2号建物跡	須恵器	环	12.9	4.0	外削：回転ナード・回転ぬ切り 内削：回転ナード・ナード	1mm大以下の砂粒含む	良好	灰褐色	内削にヘラ記号「X」あり	
10-5	2号建物跡	須恵器	环	16.0	4.9	外削：回転ナード・回転ぬ切り 内削：回転ナード・ナード	5mm大以下の砂粒含む	良好	外削：暗灰褐色～淡青灰色 内削：灰白色		
10-6	2号建物跡	須恵器	环	(17.6)	6.5	外削：回転ナード 内削：不明	4mm大以下の砂粒含む	不良	外削：暗褐色～灰褐色 内削：暗褐色～淡黄褐色		
10-7	2号建物跡	須恵器	裏	(22.6)	—	外削：回転ナード・平行タキナードのちかく 内削：回転ナード・同心内凹で具側	1mm大以下の砂粒含む	良好	外削：暗褐色～灰褐色 内削：暗褐色		
10-8	2号建物跡	土器類	裏	(34.2)	—	外削：機ナード・ハケメ 内削：機ナード・ケツアリ	1mm大以下の砂粒を多く含む	良好	外削：浅褐色～淡褐色 内削：淡褐色～褐色	内削に摩耗有	

三大寺遺跡出土土器観察表

地図 番号	出土地点	種別	基盤	口径 (cm)	高さ (cm)	調整・手法の特徴	胎 土		色 調	備 考
							施成	色調		
14-6	1号墓	土器類	环	31.6	—	外削：相正彌 内削：ミカシカ	密	良好	灰黃褐色	内面に擦れ有
28-1	1号土坑	須恵器	环	—	—	外削：回転ナメ 内削：回転ナメ	密	良好	外面：暗赤褐色 内面：青灰色	外面に灰かぶり
28-2	1号土坑	須恵器	环	13.0	3.9	外削：回転ナメ・回転糸切り 内削：回転ナメ・回転糸切り	3mm以下のみ含む	良好	外面：暗赤褐色 内面：暗灰色	口縁にやや焼きまみ
28-3	1号土坑	須恵器	环	13.5	4.8	外削：回転ナメ・回転糸切り 内削：回転ナメ・ナメ	密	中や不良	灰褐色	口縁にやや焼きまみ
28-4	1号土坑	須恵器	环	—	—	外削：回転ナメ・回転糸切り 内削：回転ナメ・ナメ	4mmの薄含む	良好	青灰色	
28-5	1号土坑	須恵器	瓶	20.1	—	外削：回転ナメ 内削：回転ナメ	密	良好	灰白色	内外面に自然歯がかかる
28-6	1号土坑	須恵器	釜	—	—	外削：回転ナメ・回転ヘラケズリ 内削：回転ナメ	6.5mm以下のみ含む	良好	外面：灰白色～暗灰色 内面：灰白色	
28-7	1号土坑	須恵器	釜	—	—	外削：回転ナメ・回転糸切り 内削：回転ナメ	密	良好	外面：淡褐色 内面：暗灰色～淡灰色	
36-1	尻廻まり1	須恵器	蓋	16.0	3.4	外削：ナメ・回転ナメ・ヘラケズリ 内削：回転ナメ	2mm以下の砂粒含む	良好	灰褐色	輪状つまみ
36-2	尻廻まり1	須恵器	蓋	17.0	4.1	外削：回転ナメ・ヘラケズリ・回転ナメ 内削：回転ナメ	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰褐色	輪状つまみ
36-3	尻廻まり1	須恵器	环	—	—	外削：ナメ・回転ナメ 内削：回転ナメ	1mm以下の砂粒ごくわずかに含む	良好	灰黄色	ヘラ記号
36-4	尻廻まり1	須恵器	高台付 环	14.8	4.4	外削：回転ナメ・静止糸切	1mm以下の砂粒含む	良好	灰黄色 内面：灰白色	外削被灰
36-5	尻廻まり1	須恵器	环	10.8	3.7	外削：回転ナメ・回転糸切 内削：回転ナメ	1mm以下の砂粒含む	良好	暗青灰色 内面：灰白色	30-2と同一個体
36-6	尻廻まり1	須恵器	环	—	—	外削：回転ナメ・ナメ・静止糸切 内削：回転ナメ・ナメ	2mm以下の砂粒含む	良好	灰褐色	第4層
36-7	尻廻まり1	須恵器	环	—	—	外削：回転ナメ・回転糸切 内削：回転ナメ・ナメ	1mm以下の砂粒含む	良好	灰褐色	
36-8	尻廻まり1	須恵器	高环	—	—	外削：回転ナメ・ナメ 内削：回転ナメ	1mm以下の砂粒含む	良好	灰褐色	上段は難観、下部は造り記号 六、合併記号へ少記号
36-9	尻廻まり1	須恵器	小型盖	8.4	5.1	外削：回転ナメ・回転ヘラ切り 内削：回転ナメ・ナメ	1mm以下の砂粒含む	良好	黄褐色 内面：暗灰色	第4層 内削に自然歯
36-10	尻廻まり1	須連器	环	—	—	外削：回転ナメ・ナメ・静止糸切 内削：回転ナメ・ナメ	2mm以下の砂粒含む	良好	灰褐色	口縁と底部の外削に 被灰、口縁内部溶着
36-11	尻廻まり1	須連器	瓶	—	—	外削：回転ナメ・物子タタキ 内削：回転ナメ・同心円タタキ	0.5mm以下の粒子多く含む	良好	灰褐色	
36-12	尻廻まり1	須連器	瓶	—	—	外削：ナメ 内削：ナメ	1mm以下の砂粒多く含む	やや不良	灰白色 内面：灰褐色	
36-13	尻廻まり1	須連器	土器	—	—	指捺による調整・削刃により目録 を表示へと書ききで表示	1mm以下の砂粒含む	良好	淡褐色	輪部・脚部のみ 眼欠落
36-14	尻廻まり1	須連器	長脚瓶	—	—	外削：回転ナメ・物子タタキ 内削：回転ナメ・相ナメ・ナメ	1mm以下の砂粒含む	良好	灰褐色	内面タタキ痕ナメ消失 か?
36-15	尻廻まり1	須連器	鉢	—	—	外削：回転ナメ 内削：回転ナメ	1mm以下の砂粒少量含む	良好	灰褐色	
36-16	尻廻まり1	須連器	鉢	—	—	外削：回転ナメ 沈鏡2条 内削：ナメ タタキ	1mm以下の白砂含む	やや不良	灰褐色土質 内削に自然歯	30-16と同一個体か?
36-17	尻廻まり1	須連器	鉢	—	—	外削：回転ナメ 沈鏡2条 内削：ナメ タタキ	1mm以下の白砂含む	やや不良	灰褐色土質 内削に自然歯	30-16と同一個体か?
36-18	尻廻まり1	須連器	—	—	—	外削：ナメ 内削：ナメ	1mm以下の白砂含む	やや不良	灰褐色 内面：灰オリーブ色	
36-19	尻廻まり2	須連器	环	13.3	4.0	外削：回転ナメ・回転糸切のちナメ 内削：回転ナメ・ナメ	2mm以下の砂粒含む	良好	灰褐色	
36-20	尻廻まり2	須連器	环	13.4	4.2	外削：回転ナメ・回転糸切 内削：回転ナメ・ナメ	2mm以下の白砂含む	良好	灰褐色 内面：灰褐色	
36-21	尻廻まり2	須連器	小型盖	10.0	3.5	外削：回転ナメ・回転糸切 内削：回転ナメ	2mm以下の白砂多く含む	良好	灰褐色～黒色	内部一部黒色
36-22	尻廻まり2	須連器	—	—	—	外削：沈化したの歯跡不明 内削：沈化したの歯跡不明	2mm以下の砂粒含む	不良	灰褐色	
36-23	尻廻まり2	須連器	瓶?	—	—	外削：ナメのち格子タタキ 内削：タタキが壊れがち	2mm以下の砂粒多く含む	良好	灰褐色	
36-24	尻廻まり2	土器類	土器 支撑支柱	—	—	外削：ナメ 内削：ナメ	2mm以下の砂粒多く含む	良好	灰褐色 内面：灰褐色	
36-25	—	須連器	环	12.8	6.1	外削：回転ナメ・静止糸切のちナメ 内削：回転ナメ・ナメ	1mm以下の白砂含む	良好	灰褐色	底面内面に剥離傷あり 要観察している
36-26	P14	須連器	环	—	—	外削：回転ナメ・回転糸切 内削：回転ナメ・ナメ	1mm以下の白砂含む	良好	灰褐色	
36-27	P14	土器類	瓶?	—	—	外削：ナメのちナメ 内削：ナメ	1mm以下の砂粒多く含む	良好	灰褐色	
36-28	6トレンチ	須連器	蓋	10.6	—	外削：ナメ 内削：ナメ	1mm以下の白砂含む	良好	灰褐色	第7-6層
36-29	6トレンチ	土器類	瓶?	—	—	外削：ナメ 内削：ナメ	1mm以下の砂粒多く含む	良好	黄褐色	第7-6層 把手のみ
36-30	東壁トレンチ	須連器	环	11.6	3.0	外削：回転ナメ 内削：回転ナメ・回転ヘラ切り	1mm以下の白砂含む	良好	灰褐色 内面：黄褐色	第7-6層 内面に「X」のへら記号
36-31	東壁トレンチ	土器類	高环	—	—	外削：ナメ 内削：ナメ	1mm以下の砂粒多く含む	良好	黄褐色 内面：浅黄褐色	第7層
36-32	東壁トレンチ	土器類	瓶?	—	—	外削：ナメ 内削：ナメ	1mm以下の砂粒含む	良好	褐色	第7層
36-33	D3	須連器	瓶	—	—	外削：ナメ 内削：ナメのちナメ	1mm以下の砂粒含む	良好	灰白色 内面：青灰色	

三大寺遺跡出土土器観察表

地図 番号	出土地点	種別	断面	口径 (cm)	高さ (cm)	調整・手法の特徴	胎 土	焼成	色 調		備考	
									外削	内削		
38-2	E 1	須恵器	环	10.0	3.2	外削：回転ナード・回転ヘラ切り 内削：回転ナード	1mm以下の砂粒含む	良好	外削：淡灰青～こぶし茶褐色 内削：灰褐色	外削：自然相		
38-3	1号建物 D 3	須恵器	环	9.4	—	外削：回転ナード・回転ヘラ切り?	1mm以下の砂粒含む	良好	外削：灰褐色～暗灰色 内削：灰白色			
38-4	C 3	須恵器	蓋	15.6	3.2	外削：回転ナード・回転ヘラケズリ 内削：回転ナード・ナード	5mm以下の砂粒含む	良好	外削：淡青灰 内削：明褐色			
38-5	C 3	須恵器	蓋	14.4	3.4	外削：回転ナード・回転ヘラケズリ 内削：回転ナード・ナード	1mm以下の砂粒含む	良好	青灰色			
38-6	C 3	須恵器	蓋	—	2.7	外削：回転ナード 内削：回転ナード・ナード	1mm以下の砂粒少量含む	良好	灰褐色	天井部は平坦面を形成		
38-7	D 2	須恵器	蓋	—	—	外削：回転ヘラケズリ(回転ナード切?) 内削：回転ナード・ナード	1mm以下の砂粒少量含む	良好	灰白色			
38-8	D 3	須恵器	环	12.8	3.8	外削：回転ナード・回転柔切 内削：回転ナード・ナード	密	良好	外削：淡赤褐色～紫灰色 内削：淡赤褐色			
38-9	C 3	須恵器	环	12.2	3.8	外削：回転ナード・回転柔切 内削：回転ナード	1.5mm以下の砂粒少 量含む	良好	灰褐色			
38-10	D 3	須恵器	环	12.0	4.5	外削：回転ナード・回転柔切 内削：回転ナード・ナード?	2mm以下の砂粒少 量含む	良好	灰白色			
38-11	D 3	須恵器	环	13.7	3.8	外削：回転ナード・回転柔切 内削：回転ナード・ナード	1.5mm以下の砂粒少 量含む	良好	外削：灰～淡褐色 内削：淡褐色			
38-12	D 3 E 4	須恵器	环	15.2	4.0	外削：回転ナード・回転柔切 内削：回転ナード・回転ナードのちナード	密	良好	青灰色	口縁部に焼きひずみ		
38-13	4号墓 墓室上	須恵器	环	15.4	3.6	外削：回転ナード・回転柔切 内削：回転ナードのちナード	細かく1mm以下の砂 粒多量含む	良好	外削：青灰色 内削：暗青灰色			
38-14	C 3	須恵器	环	10.7	3.1	外削：回転ナード・回転柔切 内削：回転ナード・ナード	2mmまでの砂粒少 量含む	良好	灰褐色	内削：淡青灰色		
38-15	C 2	須恵器	环	13.8	4.4	外削：回転ナード 内削：回転ナード	4mm大までの墨色、 白色粒子を多量含む	不良	灰白色			
38-16	C 4	須恵器	环	15.1	4.4	外削：回転ナード・静か柔切 内削：回転ナード・ナード	3mm以下の砂粒少 量含む	良好	灰白色	胎土に直径約3mmの實 体のような物質含む		
38-17	C 3	須恵器	环	11.2	4.4	外削：回転ナード・回転柔切 内削：回転ナード・ナード	1.5mm以下の砂粒含 む	良好	淡青灰色			
38-18	C 3	須恵器	环	14.2	4.2	外削：回転ナード・回転柔切 内削：回転ナード	細かく5mm程度の黑 色砂粒含む	良好	青灰色			
38-19	C 3	須恵器	环	13.0	3.7	外削：回転ナード・切り離しのち回転ナード 内削：回転ナード・ナード	2mm大までの砂粒少 量含む	良好	外削：墨灰色 内削：暗青灰色			
38-20	C 3	須恵器	环	14.2	4.3	外削：回転ナード・回転柔切 内削：回転ナード・ナード	2mm以下の砂粒少 量含む	良好	灰褐色～淡黄褐色			
38-21	E 4	須恵器	环	17.4	3.7	外削：回転ナード・回転柔切 内削：回転ナード・ナード	細かく1mm大までの 白砂含む	良好	暗青灰色			
38-22	D 2 D 3	須恵器	环	13.7	4.0	外削：回転ナード・静か柔切 内削：回転ナード・ナード	密	良好	外削：灰～青灰色 内削：青灰色	重ね焼きの痕跡		
38-23	E 1	須恵器	环	11.6	3.8	外削：回転ナード・回転柔切 内削：回転ナード・ナード	0.5mm以下の砂粒少 量含む	良好	外削：暗灰色 内削：灰色	35-5と同一個体		
38-24	C 3	須恵器	环	16.2	5.6	外削：回転ナード・回転柔切 内削：回転ナード・ナード	密	やや不良	外削：淡紫褐色～灰色 内削：青灰～淡紫褐色			
38-25	C 2 D 2	須恵器	环	15.0	6.1	外削：回転ナード・静か柔切のちナード? 内削：回転ナード・ナード	2mm以下の砂粒少 量含む	良好	外削：灰～灰褐色 内削：墨灰～灰色			
38-26	B 3	須恵器	环	—	—	外削：回転ナード・回転柔切 内削：回転ナード	細かい	良好	暗青灰色	密度しているため変形		
38-27	4号上段 E 4	須恵器	环	—	—	外削：回転ナード・回転柔切 内削：回転ナード・ナード	1mm以下の砂粒含む	良好	外削：青灰～灰褐色 内削：青灰			
38-28	C 2	須恵器	环	13.0	—	外削：回転ナード・回転ヘラケズリ 内削：回転ナード・ナード	1mmまでの墨色、 白色粒子含む	良好	青灰色			
38-29	1号建物 D 3	須恵器	环	—	—	外削：回転ナード・回転ヘラケズリ 内削：回転ナード・ナード	7mmの堆積含む	良好	暗青灰色	底部外壁に工具による 溝痕あり		
38-30	D 3	須恵器	环	—	—	外削：回転ナード・回転柔切 内削：回転ナード・ナード	1mmの大砂粒含む	良好	淡青灰色			
38-31	E 3	須恵器	环	—	—	外削：回転ナード・回転柔切 内削：回転ナード・ナード	密	良好	暗青灰色	内削に「×」のへき記号		
38-32	B 3	須恵器	环	—	—	外削：回転ナード・回転柔切 内削：回転ナード・ナード	密	良好	暗青灰色			
38-33	C 3	須恵器	环	—	—	外削：回転ナード・回転柔切 内削：回転ナード・ナード	7mmの堆積含む	良好	暗青灰色			
38-34	E 1	須恵器	环	—	—	外削：回転ナード・回転ヘラケズリ(静止止め)? 内削：回転ナード・ナード	1mmの大砂粒含む	良好	灰色			
38-35	C 2	須恵器	高台付 环	18.7	4.7	外削：回転ナード・回転柔切 内削：回転ナード・回転ナードのちナード	2mm以下の白砂多く 含む	良好	褐色 内削：灰色			
38-36	D 2	須恵器	高台付 环	—	—	外削：回転ナード・回転柔切 内削：回転ナード・ナード	1.5mm以下の砂粒含 む	良好	外削：灰褐色 内削：灰白色			
38-37	—	須恵器	蓋	—	—	外削：回転ナード・系切 内削：ナード	5mm以下の砂粒含む	良好	灰褐色	外壁に使用する 道具として使用か		
38-38	F 4	須恵器	蓋	—	—	外削：回転ナード・回転柔切 内削：回転ナード・ナード	密	良好	外削：暗青灰色 内削：青灰色	削器・内部底面に自然 痕		
38-39	E 4	須恵器	蓋	—	9.0	4.4	外削：回転ナード・回転柔切? 内削：回転ナード・ナード	密	良好	外削：暗灰～灰色 内削：灰色		
38-40	E 4	須恵器	灯明皿	9.2	2.9	外削：自然のため調整不明 内削：ナード	密	良好	外削：暗オーラー～黒色 内削：灰褐色	外削：自然相		
38-41	E 4	須恵器	灯明皿	9.6	—	外削：自然のため調整不明 内削：ナード	密	良好	外削：暗オーラー～黒色 内削：青褐色	外削：自然相 口縁部に重ね焼き付着		
38-42	E 3	須恵器	灯明皿	—	—	外削：回転ナード・ナード	密	良好	外削：暗オーラー～黒色 内削：青褐色			

三大寺遺跡出土土器観察表

標識番号	出土地点	種別	基盤	口径 (cm)	高さ (cm)	調整・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
40-43	C 3	須恵器	高台付 高台付	10.8	10.8	外削・回転ナダ・内削・外切のちナダ?	1.5m以下の砂粒含む	良好	外面: 噴葉灰~黄褐色 内面: 噴葉灰~深褐色	肩部を中心に撒して自然焼。ほぼ完形。
40-44	C 3	須恵器	高台付	—	—	外削・回転ナダ・内削・外切のちナダ?	0.5m以下の砂粒含む	良好	外面: 黄褐色 内面: 灰色	須恵器の外削・内削の跡。
40-45	E 3	須恵器	高台付 曲	—	—	外削・回転ナダ・内削・外切のちナダ?	—	密	良好	灰褐色
40-46	B 3	須恵器	曲?	—	—	外削・回転ナダ・内削・外切のちナダ?	—	密	良好	灰色
40-47	D 3	須恵器	鉄鋤形 土器	19.8	—	外削・回転ナダ・内削・外切のちナダ?	5m以下の砂粒含む	良好	外面: 噴葉灰~灰褐色 内面: 噴葉灰~灰白色	口縁に焼き赤み。外側に墨色焼けの跡。
40-48	E 3	須恵器	曲?	—	—	外削・ハサウエスの回転ナダ・静止崩削	—	密	良好	外面: 青灰~緑灰色
40-49	D 2	須恵器	曲?	—	—	外削・ハサウエスの回転ナダ・回転崩削	4mm大までの砂粒含む	良好	外面: 青灰褐色 内面: 噴葉灰	内面に無い自然崩。
40-50	D 3	須恵器	把手	—	—	外削・指揮・丸・ナダ	—	密	良好	外面: 黄褐色 内面: 噴葉灰
40-51	B 3 C 3	須恵器	曲	16.2	—	外削・回転ナダ・平行内タキ	—	密	良好	外面: 噴葉灰~灰褐色 内面: 噴葉灰~灰白色
40-52	B 5	須恵器	横張	12.4	—	外削・回転ナダ・梢・内心タキ	—	扁平化	良好	青灰褐色
40-53	C 3	須恵器	横張	—	—	外削・平行内タキの心力目	—	密	良好	外面: 噴葉灰~黄褐色 内面: 灰白色
40-54	E 1	須恵器	鉢	44.8	—	外削・回転ナダのちタマ・カ目	—	1mm以下の砂粒含む	良好	青灰褐色
41-55	B 5	土器類	环	12.3	2.2	外削・ヨコヨコ・底原へ下切	—	密	良好	淡褐色
41-56	C 3	土器類	手握	6.4	3.9	外削・指揮・丸	—	内面: ヨコヨコ	内面: 1mmの礫合む	須恵器の外削形状にやや因む。
41-57	C 3	土器類	裏	27.2	—	外削・ヨコヨコ	—	4mm大の礫合む	良好	淡褐色
41-58	E 2	瓦質 土器	裏	—	—	外削・格子タキ	—	2mm大の砂粒含む	不良	外面: 淡褐色 内面: 灰白色
41-59	C 3	土器類	土割 支脚	—	—	ナダ・指揮・さき	—	1mm以下の砂粒多く含む	良好	淡黃褐色~淡褐色
41-60	A トレンチ	土器類	土割 支脚	—	—	ケズリのちナダ?	—	2mm以下の砂粒多く含む	良好	淡黃褐色~褐色
41-61	C 3	土器類	—	—	ケズリのちナダ? 指揮	—	2mm以下の砂粒多く含む	良好	淡褐色	残存する底は水平。
41-62	D 3 D 4	中国 青花	瓶	16.4	—	外削・施釉 鎧鉢文様(蓮舟) 内削・施釉 鎧鉢文様(草花文様)	—	密	良好	黒緑色
41-63	E 4	中国 青花	瓶	12.3	—	外削・施釉 ハサウエス	—	密	良好	青白地 青花か側面斜め付、高台圓 一部に無釉 路木口群?

三大寺遺跡 I 区出土鉄器観察表

標識番号	出土地点	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
5-2	D 3	鍔	5.4	2.5	0.7	主頭部・茎部欠損
9-27	1号墳物置	鍔	—	2.0	0.3	両頭折り出し部残存 一部欠損
16-11	2号墳	鍔	4.6	0.3	0.5	頭部欠損
16-12	6号墳	鍔	3.5	0.6	0.5	定期 全体的にやや曲る
16-13	3号墳	鍔	3.0	0.6	0.5	頭部欠損
16-14	3号墳	鍔	2.3	0.3	0.5	鍔打片
24-3	11号墳	鍔	13.0	2.3	1.0	刀部分
24-4	11号墳	鍔	6.5	0.8	0.6	全体的に『J』字型に曲る
24-5	11号墳	鍔	4.1	0.6	0.5	頭部欠損し、やや曲る
24-6	11号墳	鍔	4.1	0.7	0.6	対称 頭部曲る
24-7	11号墳	鍔	3.1	0.6	0.4	頭部欠損
24-8	11号墳	鍔	3.6	0.5	0.4	頭部欠損
24-9	11号墳	鍔	4.3	0.4	0.4	頭部欠損し、曲る
24-10	11号墳	鍔	4.4	0.3	0.3	頭部欠損
24-11	11号墳	鍔	4.5	0.3	0.3	定期
24-12	11号墳	鍔	4.3	0.4	0.4	頭部欠損
24-13	11号墳	鍔	2.8	0.3	0.3	頭部欠損
24-14	11号墳	鍔	2.8	0.3	0.4	頭部欠損
24-15	11号墳	鍔	3.4	0.3	0.3	頭部欠損
24-16	11号墳	鍔	2.1	0.5	0.4	頭部欠損
24-17	11号墳	鍔	2.1	0.3	0.4	頭部欠損
24-18	11号墳	鍔	1.1	0.4	0.4	頭部欠損
24-19	11号墳	鍔	2.1	0.6	0.6	頭部欠損
24-20	11号墳	鍔	2.5	0.3	0.4	頭部欠損
24-21	11号墳	鍔	2.3	0.5	0.4	頭部欠損
24-22	11号墳	鍔	2.1	0.4	0.3	頭部欠損
24-23	11号墳	鍔	2.8	0.3	0.4	頭部欠損し、やや曲る
24-24	11号墳	鍔	3.4	0.4	0.3	頭部欠損し、曲る

三大寺遺跡 I 区出土銅鏡一覧表

擇選番号	出土地点	名称	割合年代	備考
14 - 7・8	1号墳	圓元通寶	唐 621年	
14 - 9	1号墳	辟邪元寶	北宋 1009年	
14 - 10~12	1号墳	皇宋通寶	北宋 1038年	
14 - 13	1号墳	開寧元寶	北宋 1039年	
14 - 14~18	1号墳	元豐通寶	北宋 1078年	
14 - 19~20	1号墳	紹聖元寶	北宋 1084年	
14 - 21	1号墳	熙祐元寶	北宋 1084年	
14 - 22~24	1号墳	—	—	
16 - 1	3号墳	圓元通寶	唐 621年	
16 - 2	3号墳	天聖元寶	北宋 1023年	
16 - 3	3号墳	熙祐元寶	北宋 1084年	
16 - 4~10	3号墳	永安通寶	明 1408年	

三大寺遺跡 I 区出土五輪塔觀察表

擇選番号	出土地点	部 位	高さ (cm)	外輪径 (cm)	内輪径 (cm)	軸径 (cm)	最大径 (cm)	輪穴径 (cm)	輪穴深 (cm)	最大径 (cm)	石 材	備 考
14-1	B5	空瓶輪	27.0	29.0	18.0	7.5	2.5	—	—	—	砂岩(東持右)	輪部に刀先幅1cmの溝状の工具痕 横部以外の加工痕は不明瞭 空瓶輪の筋部が溝状
14-2	B5	空瓶輪	25.0	15.0	14.0	6.0	4.0	—	—	—	安山岩A	全体的に表面風化、室窓形の空瓶
14-3	B5	火輪	12.0	—	—	—	—	34.0	8.0	3.5	砂岩(東持右)	風化が激しい 加工痕は不明瞭 次面に刀先幅1.5cmの加工痕 空瓶輪14-1と組み合う可能性
14-4	B5	水輪	18.5	—	—	—	—	—	—	30.0	砂岩(東持右)	垂直の鍛片 上下面に凹み 下面の側面に込み凹
14-5	3号墳	地輪	18.0	—	—	—	—	—	—	—	砂岩(東持右)	刀先幅1.9cmのノミ痕が調査に残る 下面に4.0cm削除の跡が見られる
17-1	3号墳	空瓶輪	20.5	—	13.5	—	—	—	—	—	安山岩A	空瓶輪に対して瓶輪が大きい
17-2	3号墳	火輪	16.0	—	—	—	—	27.0	8.5	4.0	安山岩A	
17-3	3号墳	火輪	17.5	—	—	—	—	27.0	8.5	6.2	砂岩(東持右)	比較的、研磨や削離が少ない
17-4	3号墳	火輪	15.0	—	—	—	—	24.0	5.5	4.0	安山岩A	加工痕は不明瞭
17-5	3号墳	火輪	—	—	—	—	—	—	—	—	安山岩A	側面片
17-6	3号墳	水輪	15.0	—	—	—	—	—	—	25.0	砂岩(東持右)	上下面に浅い窪み
17-7	3号墳	水輪	17.5	—	—	—	—	—	—	26.0	安山岩A	下下面に浅い窪み
17-8	3号墳	水輪	16.0	—	—	—	—	—	—	25.5	砂岩(東持右)	刀先幅1.1cmのノミ痕 上下面に2.0cm前後の窪み
17-9	3号墳	水輪	16.5	—	—	—	—	—	—	23.5	砂岩(東持右)	刀先幅1.1cmのノミ痕 上下面に1.5cm前後の窪み
19-1	4号墳	空瓶輪	30.5	16.5	15.5	6.0	4.2	—	—	—	安山岩A	尖円形の空瓶 空瓶輪の筋部が溝状
19-2	4号墳	空瓶輪	20.0	16.0	17.0	6.5	3.0	—	—	—	砂岩(東持右)	工具痕は不明瞭 空瓶輪の筋部が溝状
19-3	4号墳	空瓶輪	20.0	15.0	—	—	—	—	—	—	砂岩(東持右)	下端部に削離 空瓶輪の筋部が溝状
19-4	4号墳	空瓶輪	17.0	—	13.0	6.5	3.5	—	—	—	砂岩(東持右)	空瓶輪下端の鍛片
19-5	4号墳	火輪	14.0	—	—	—	—	25.0	6.0	4.0	安山岩A	加工痕は不明瞭
19-6	4号墳	火輪	17.5	—	—	—	—	25.5	5.0	3.5	安山岩B	ノミ削り跡 下面はあまり加工しない 各片が丸みを帯びる
19-7	4号墳	水輪	15.0	—	—	—	—	—	—	23.5	砂岩(東持右)	刀先幅1.1cmのノミ痕 上下面に1.5~2.0cm前後の窪み
19-8	4号墳	水輪	15.0	—	—	—	—	—	—	23.5	砂岩(東持右)	刀先幅1.1cmのノミ痕 上面に深さ3.0cmの削り込み
19-9	4号墳	地輪	18.0	—	—	—	—	22.5	—	—	砂岩(東持右)	上面に刀先幅4.0cmの削り込みノミ痕
20-1	5号墳	水輪	17.0	—	—	—	—	—	—	21.5	砂岩(東持右)	刀先幅2.0cmのノミ痕 上下面に2.2~2.5cmの削み
24-1	11号墳	地輪	20.0	—	—	—	—	25.0	—	—	安山岩A	上面に黒く焼けた跡 上面に加工痕
25-1	B3	空瓶輪	23.0	16.0	16.5	7.0	4.5	—	—	—	安山岩B	尖円形の空瓶
25-2	B3	空瓶輪	27.5	16.5	15.0	7.0	5.5	—	—	—	安山岩A	尖円形の空瓶 加工痕は不明瞭 横部は浅い凹凸
25-3	C3	空瓶輪	27.5	15.5	15.0	6.0	4.5	—	—	—	安山岩A	尖円形の空瓶 加工痕は不明瞭
25-4	B5	空瓶輪	21.5	15.0	15.0	—	—	—	—	—	安山岩A	風化が激しい両端を削離
25-5	B 4	火輪	18.5	—	—	—	—	26.0	7.5	4.5	安山岩A	風化が激しい 加工痕は不明瞭
25-6	C 4	火輪	11.5	—	—	—	—	22.0	7.5	5.0	砂岩(東持右)	加工痕は不明瞭
25-7	B 4	火輪	13.0	—	—	—	—	26.0	—	—	安山岩A	風化が激しい
26-8	B 4	火輪	—	—	—	—	—	—	5.5	3.0	砂岩(東持右)	底部の鍛片 方形の横穴
26-9	B 4	火輪	—	—	—	—	—	26.0	—	—	砂岩(東持右)	風化が激しい 加工痕は不明瞭
26-10	B 5	火輪	8.5	—	—	—	—	27.0	—	—	砂岩(東持右)	
26-11	B 4	火輪	9.5	—	—	—	—	27.5	—	—	砂岩(東持右)	
26-12	B 4	火輪	9.5	—	—	—	—	—	—	—	安山岩A	側面片
26-13	B 4	水輪	18.0	—	—	—	—	—	—	29.0	安山岩A	下面にわずかな窪み

※ 安山岩A : (大山角閃石基安山岩) 安山岩B : (大海嶺石系安山岩)

三大寺遺跡 I 区出土土石製品觀察表

擇選番号	出土地点	種別	幅 (cm)	高さ (cm)	石材	備考
16-15	2号墳	石臼	12.0	8.3	安山岩A	石臼 : 放射状に横目 径4 cmの孔あり (數物供給孔)
A1-64	4号墳	石質品	14.8	10.3	砂岩(東持右)	五輪塔(水輪) か

※ 安山岩A : (大山角閃石基安山岩) 安山岩B : (大海嶺石系安山岩)

第7章 総括

(1) 古墳

調査I区中央部には、一辺10m、高さ0.5mの方墳状の高まりが確認された。調査の結果、埋葬施設や盛土は失われているが、方墳状の高まりを呈することにより古墳と想定され、周辺から出土した須恵器及び鉄鎌から時期は古墳時代中期後葉頃と考えられる。

(2) 炭溜まり

時期 炭溜まり1では、高広遺跡における編年（以後高広編年とする）のII A期及びIII B～IV A期の須恵器が出土している。蓋坏の口縁端部にかえりが付く蓋は出土しておらず、II B～III A期の須恵器は含まれていないと考えられる。

炭溜まり2では、高広編年IV A期の須恵器が出土しているが、I B期に遡りうる蓋坏片やII A期の坏片も含まれている。

炭溜まり1及び炭溜まり2で出土する須恵器は、II A期及びIII B～IV A期の遺物が主体と考えられ、異なる2時期の遺物が出土していると考えられる。ただし山津窯跡における編年（以後山津編年とする）では、高広編年のII A期にあたる遺物は単独で成立しておらず、II B期の遺物と同じ時期に含まれている。その場合炭溜まり1及び炭溜まり2で出土する遺物は古墳時代後期から奈良時代にかけての連続性が考えられてくるので、炭溜まり1と炭溜まり2の時期に関しては検討の余地は残される。

また遺構検出面直下の層（第32図第7層）は、高広編年II A期の遺物包含層であり、この時期に山崩れ等の地形の変動があったことも想定される。

遺物 炭溜まり1では、炭片や黄灰色礫片と共に遺物が出土したが、遺物の多くは破片であった。

また炭溜まり2では、後世に攢乱などを受けたと考えられるが、炭片や黄灰色礫片と共に遺物が出土している。

三大寺遺跡周辺の遺跡や大井古窯址群で確認されている須恵質土馬（35-13）が炭溜まり1で出土した。

炭溜まり1では小型の壺と考えられる須恵器（35-9、10）が出土しているが、製作技法、胎土、焼成に差異が見受けられる。前者は底部切り離しがハラ切りで、中央付近が外側にやや張り出している。後者の底部切り離しは自然釉付着のため不明であるが、きれいな平坦面を呈している。また前者は比較的厚手であり、後者は薄手で硬質に焼き上がっている感がある。

薦沢A遺跡など周辺の遺跡でも多く確認されている須恵器の瓶片（35-11,12）が出土している。高広編年II A期頃と考えられる。

この他にも移動式窯の破片、赤彩の施されている土師器の坏もしくは皿の破片、窯壁体の破片などが出土している。

性格 炭溜まり1及び炭溜まり2については、本来同じ性格の遺構であった可能性が考えられる。しかし炭溜まり2の位置は高広編年IV A期頃に柱列1～3が建てられており、また後世の攢乱もあったため、土層堆積状況が炭溜まり1と異なっていた。

炭溜まり1に類似する遺構としては、池ノ奥窯跡の3号土壙が挙げられる。黒色炭化物層から高

広編年ⅠB～ⅣB期（中心はⅡA～ⅢB期）の須恵器、土師器が出土している。また赤色塗彩の須恵質土馬、土師質土馬が1体ずつ出土している。遺構の性格は住居跡等の生活関連遺構ではなく、須恵器窯にともなう粘土探掘壙とも考えられるとしてある。

高広編年ⅡA期頃もしくはⅢB～ⅣA期頃の時期には、三大寺遺跡周辺では、須恵器窯が確認され、三大寺遺跡近辺にもこの時期須恵器窯が存在した可能性が考えられるが、今回の調査では灰原など須恵器窯と直接かかわる遺構は確認されなかった。しかし、炉壁体などが出土していることより須恵器生産に伴う場であった可能性は考えられる。また三大寺遺跡からは土馬が出土しているよう、祭祀行為などが行われていたことも考えられる。これらのこととふまえ炭溜まり遺構の性格について推測する。

①須恵質土馬が出土していることによりこの場で祭祀が行われた。時期は高広編年ⅡA期頃の時期もしくは高広編年ⅢB～ⅣA期頃の二つの時期が考えられる。

②須恵器窯に伴う灰原などから遺物がこの場所に持ち込まれた。理由は様々考えられるが、その中の一つとして、整地作業的な意味合いがあったことが想定される。時期は高広編年ⅡA期頃の時期もしくは高広編年ⅢB～ⅣA期頃の二つの時期が考えられる。

先述した池ノ奥窯跡の3号土壙は粘土探掘壙の可能性も考えられていたが、三大寺遺跡調査地の遺構検出面に関しては、比較的水はけの良い土質であり、粘土探掘壙の可能性は低いと思われる。逆に薪などを大量に得るため樹木の伐採が行われた場合、山崩れ等が起こりえたかもしれない。

（3）柱列1～3

柱列1～3は炭溜まり2部分で検出されている。土層（第32図）の観察よりこの部分の炭溜まりに関しては、後世の擾乱を大きく受けていると考えられる。（5層）6-①層は柱列1および（もしくは）柱列2廃絶後の埋土と考えている。また6-②層は、6-①層同様、柱列廃絶に伴う埋土である可能性もあるが、柱列を構築する際の盛土の可能性も考えられる。

（4）東壁トレンチ・トレンチ6

調査II区の遺構検出面直下の第7層は高広編年ⅡA期の遺物包含層である。自然災害等による土砂の移動を想定した場合、調査II区を形成する谷の上方に位置する東側の谷奥部分に生活空間などの施設が存在していた可能性が考えられる。

（5）建物跡

調査I区の北側、丘陵斜面に高広編年ⅣA期の掘立柱建物跡と考えられる建物跡2棟が検出された。1号建物跡からは、多くの遺物が出土しているが、特筆すべき遺物として陶製分銅（權）が出土している。松江市福原町に所在する中嶺遺跡からも權が出土しており、同遺跡の報告書によると島根県では12遺跡から44点の權が出土している。權の出土する遺跡の多くは6世紀後半から平安時代にかけての官衙関連遺跡や須恵器生産にかかわる遺跡である。須恵質の權もしくは權の可能性がある遺物は、三大寺遺跡の周辺では、中嶺遺跡、薦沢A遺跡（松江市朝駒町）、イガラビ遺跡（松江市大井町）、山津窯跡（同）で出土している。また出雲国府跡では、銅製の權が出土している。

(6) 古墓群

古墓群は、調査I区の西側に集中して検出された。それぞれの墓の特徴は一覧表のとおりである。基壇を伴う墓も確認されたが、基壇を構築する部材として、遺跡周辺で確認される自然石（安山岩と考えられる）と共に五輪塔の部材が使用されている。五輪塔の部材は基壇以外の部分からも出土しているが、この古墓群内で五輪塔として使用されていたかは不明である。また五輪塔部材の材質に関しては、大山角閃石安山岩系の安山岩（A）、大海崎石系の安山岩（B）、来待石系の砂岩（C）の3種類に大別される。2号墓では五輪塔部材と同じ石材Aの石臼が出土している。石材Cは比較的風化が早い石材であるが、三大寺遺跡で出土した石材Cの五輪塔は、一部の石材に風化面が確認されるが、大部分の石材は風化していない。材質による五輪塔部材の時期差については、空風輪の括れ部の特徴により、石材Cを使用した五輪塔が、他の石材を使用したものより新しいと推定される。五輪塔を伴う古墓群が発掘調査された事例は松江市内でも数例あるが、松江市八雲村で調査された谷ノ奥遺跡の事例が、三大寺遺跡における状況に似ている。共通する部分を以下に挙げる。

①五輪塔の石材が3種類確認されている。（双方で確認されている砂岩製の石材は同じ産地の可能性が考えられる。）

②火葬墓の墓壇掘り方は長軸及び短軸が1m前後の橢円形を呈し、骨片及び炭片を含む黒色土が埋められている墓が確認されている。

③方形の基壇が組まれている。（もしくは可能性がある。）

④谷ノ奥遺跡所在地は小字名が「法正寺」であり、星上寺の末寺が存在したという口承が残されているという。一方三大寺遺跡では、調査地の一部の小字名が「三大寺」であり、付近にも「別所」、「奥別所」など寺に関係すると考えられる小字名があり、「三大寺」付近に寺が存在していたという伝承が残されている。

両遺跡の異なる点としては、谷ノ奥遺跡では、五輪塔の部材は、基壇部分に転用はされていないようであること、寛永通寶が出土していることなどが挙げられる。三大寺遺跡の特徴は、基壇や土葬墓の標石として五輪塔部材が使用されていること、11号墓において墓壇を覆う盛土が確認されたことが挙げられる。

以上のことから三大寺遺跡の古墓群について推測されることを以下に記述する。今回検出された古墓群では、より新しいと考えられる石材Cを使用した五輪塔部材が基壇の部材として使用されて

三大寺遺跡中世墓一覧表

遺跡名	種別	基壇			島壇			五輪塔	標石	自然石	出土遺物					備考
		平面形	幅(m)	高さ(m)	平面形	幅(m)	高さ(m)				横刃	土器	釘	古鏡	その他	
1号墓	火葬墓	方形基壇	1.4	1.5	0.25	—	—	—	—	○	○	—	瓦1	—	20	—
2号墓	火葬墓	（方形基壇）	1	0.9	0.2~0.3	—	—	—	—	○	○	—	—	1	—	60DP
3号墓	火葬墓	方形基壇	1.3	1	0.25	—	—	—	—	○	○	○	○	○	24(円筒)	10
4号墓	（供養塔）	長方形基壇	2	1.5	0.25~0.3	—	—	—	—	○	○	○	—	—	—	—
5号墓	土葬墓	—	—	—	（方形）	1	0.85	0.4	○	○	○	○	—	—	—	理蕃の痕跡なし (60cm部分に集石)
6号墓	（土葬墓）	—	—	—	（方形）	0.9	0.65	0.3	—	○	○	—	—	1	—	—
7号墓	土葬墓	—	—	—	（方形）	0.95	0.55	0.3	—	○	○	—	—	—	—	—
8号墓	（火葬墓）	—	—	—	不整形円形	0.85	—	0.6	—	—	—	—	—	—	—	—
9号墓	土葬墓	—	—	—	椭円形	1.4	0.85	0.6	—	—	—	—	—	—	—	—
10号墓	（火葬墓）	—	—	—	椭円形	0.95	0.7	0.25	—	○	○	—	—	—	—	—
II号群	1 大型墓	方形基壇	1.4	1.25	0.3	（方形）	0.65	0.65	0.2	○	○	○	○	○	21 (陶片)	通王道標石
	2 大型墓	—	—	—	椭円形	0.5	0.45	0.15	—	—	—	—	—	—	—	#
	3 大型墓	—	—	—	長方形	1.02	0.7	0.2	—	○	○	—	—	—	—	#
	4 上等墓	—	—	—	不整形円形	0.85	0.7	0.25	○	○	—	—	—	—	—	異形円
12号墓	火葬墓	—	—	—	不整形円形	1.35	0.5	0.2	—	—	—	—	○	○	—	—
13号墓	火葬墓	—	—	—	不整形円形	1.2	0.6	0.1	—	—	—	—	○	○	—	—

※括弧は推測される項目

いたり、土葬墓の標石として使用されているので、当初この古墓群内で五輪塔として使用するため持ち込まれたかは不明である。ただし、4号墓は供養塔の可能性が考えられるので、五輪塔が建てられた可能性は考えられ、他の基壇を持つ墓についても同様である。また先述したとおり、石材Cに風化が見受けられることより、この古墓群は構築されてそれほど時間がたたない間に土に埋まるもしくは埋められるなどして石材が保護されたことが想定される。出土する銅錢が宋錢、明錢などであることより、古墓群の時期は室町時代から江戸時代初め頃と推測される。

様々な形態の墓が確認されたが、生活域などの周辺の状況や、被葬者の性格などは不明である。

参考文献

- 加藤義成 1997 『修訂出雲国風土記参究』今井書店
上田正昭編 『出雲の神々 神話と氏族』筑摩書房
平凡社 1995 『島根県の地名 日本歴史地名大系33』
兵庫埋蔵銭調査会 1996 『日本出土銭総覧』
廣江耕史 「出雲の土馬」『えとのす』16 新日本教育図書 1981
今岡 稔 「山陰の石塔二三について - 2-」『島根考古学会誌 第8集』島根考古学会 1991
今岡 稔・今岡利江 「山陰の石塔二三について-10-」『島根考古学会誌 第19集』島根考古学会2002
内田律雄・岩橋康子・藤原 哲 2005 「山陰地域の土馬集成」『島根考古学会誌第22集』島根考古学会2005
朝酌郷土史編集委員会 2001 『朝酌町誌』
宮本佐知子 「国内出土權衡資料」『大阪市文化財論集』(財) 大阪市文化財協会 1994
安来市教育委員会 1998 『清水大日堂裏古墓発掘調査報告書』
東出雲町教育委員会 2008 『古城山遺跡』
松江市教育委員会 1988 『薦沢A遺跡・薦沢B遺跡・別所遺跡』
松江市教育委員会 1990 『御田遺跡・朝酌荒神遺跡・イガラビ遺跡・イガラビ古墳群・池ノ奥古墳群・池ノ奥C、D遺跡・池ノ奥A遺跡・池ノ奥窓跡』
松江市教育委員会 1998 『袋尻遺跡群発掘調査報告書』
八雲村教育委員会 2002 『谷ノ奥遺跡』
八雲村教育委員会 2005 『寺谷五輪塔群』
江津市教育委員会 2006 『反坂遺跡』
島根県古代文化センター 2000 『松江市東部における古墳の調査』
島根県古代文化センター 2004 『出雲国風土記の研究II 島根郡朝酌郷調査報告書』
島根県教育委員会 1984 『高広遺跡』
島根県教育委員会 1992 『中竹矢遺跡』
島根県教育委員会 2000 『社日古墳』
島根県教育委員会 2002 『田中谷遺跡・塚山遺跡・下がり松遺跡・角谷遺跡』
松江市教育委員会 2006 『大井窓跡群 山津窓跡・山津遺跡発掘調査報告書』
島根県教育委員会 2007 『東前田遺跡・大谷口遺跡・中崩遺跡・金クソ谷遺跡1区・2区・3区』